

---

# Steins;Gate 「after」

心也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Steins;Gate「after」

### 【コード】

N9086W

### 【作者名】

心也

### 【あらすじ】

トゥルーエンドのその後のお話です。シリアスな内容も用意してあります。

入院患者 岡部倫太郎（前書き）

ぶつちぎりに自己満足な二次創作です。そんな小説でもよければ、読んでやってください。あと、比翼恋理のネタもパクっていたりします！ネタバレごめんなさい！だっていい設定なんですもん！

内容は、Steins;Gateのトゥルーエンドの後を書いています。人によっては、そうじゃないだろお前！と思われることもあるでしょう。あくまでも、自己満足です。Steins;Gateを自分の中で生かしていくための妄想です。

それにしても、Steins;Gateは本当にとんでもない、本当に凄い作品だと思います。この作品に知りあえて本当によかった。このSteins;Gateに携わった方々に、ありがとうございます。まずと言いたいです。

ちなみに、まだ全部かけていないので随時upと言う形になります。ごめんなさい。よろしくお願いします。

## 入院患者 岡部倫太郎

くぅ…やはり痛いな…。少し麻酔が切れてきたようだ。

紅莉栖を助けるために、中鉢を挑発して刺された俺。

タイムマシンで移動して、ラジオ会館の屋上に倒れた訳だが、もう少しで死ぬところだったらしい。

医者というのは客観的に命を見る。こちらは冷や汗どころじゃないのだが。

そして今は、入院患者の身。まゆりが本当によく世話を焼いてくれている。

しかししかしだ…下の世話までは全力で遠慮したかったのだが…動けない状態では、どうしようもなかったな…

俺がこの世界での記憶があるのは、8月21日から。

それ以前の、このシュタインズゲートでの記憶はまったくくない。というか、俺に存在しない。

俺は刺された時のショックで、記憶喪失になったと言うことにした。

我ながらいい言い逃れだったと思う。刺した犯人も記憶にないと言えた。

そして、俺が過去に取った行動に関しても人に言われてから、そうだったのか！という態度を取っても不自然ではない。

いまのところ確定しているのは、萌郁とIBM5100を探したこ

とぐらいか。

これは刺されて戻ってくる以前の俺の行動だ。当然記憶にはない。

他にも無いか、ラボメン達にも聞いてみた。

これといって特別な行動はしていないようだった。

そうだ、ひとつ驚いたことがある、まゆりがラボに住むことになったことだ。

父親が転勤することになって、両親が引っ越すことを決めたらしい。

しかし、まゆりは東京に残りたいと言ったそうだ。

俺は、まゆりの強い意志に驚いた。まさか、両親に反対するとは…。

正直言えば、まゆりがここに残ってくれたことは、本当にうれしかった。

本人には、とても恥ずかしくて言えないが。

そして、降ってわいたラボのスポンサー。その人の好意により

ラボはビルごと改築されることになった。改築といっても、ラボは改装というのか。

ビル全体は耐震工事だった。その上ラボのセキュリティは格段に向上するらしい。

ミスターブラウンは、説得の必要がないぐらいに上機嫌だった。

それにしても、ミスターブラウンが見舞いに来てくれるとは思わなかった。

人としていい人なんだろう。そうになると、影でやっていることの理由が分からないな。

やたら、俺が別人になったとか言っていた。それもそうだ。  
タイム・リープとかタイムマシンとか、普通ありえない事をやってきたのだ。

何か俺に変わった所があってもおかしくない。って、なんでミスターブラウンだけなんだ…

そういえば、ミスターブラウンはスポンサーについて聞いてきたが何も言わない約束だったので言わないでおいた。

ラボに親交があつて、まゆりがラボに住むことを早くから知ることができる人物。

そして資金力もあると言ったら、一人しかない。

それにしても、紅莉栖は元気でいるだろうか。

7月28日にラジオ会館で殺人事件は起こっていない。

紅莉栖は中鉢を人を刺したことで訴えたらしい。しかし、刺された人間はいない。

当然だ、刺された人間は今ここに入院している。ということ、被害者不明のままらしい。

おそらく、探したと思うが今の紅莉栖は、俺が誰か知らない。

そして、刺されたはずの俺はピンピンしていたはずだ。

警察が捜したとしても、分からなかった。

そんな過去改変が起きたのだろうか。

それにしても紅莉栖を確実に助けることはできたようだ。

探そうかとも思ったが、世界線は変わった。それに、だいぶ時間も過ぎてしまった。

第一、今の紅莉栖は3週間一緒に過ごしてきた紅莉栖ではないのだ。いつかまた研究論文が発表されて、天才少女の名を世間に知らしめるのだろうか。

自分の愛した人を、自分の命をかけて守った。それでいい。俺はそれで満足している。

全治一か月だ。時間はたつぷりとある。

まゆりの勧めで入院してから、暇つぶしとして日記を書くことにした。

しかし、入院生活では日記に書くことが少なすぎる。ほとんど自分の回想録になってしまう。

でも、他世界線の記憶はいつか役に立つだろう。注意すべきは人目に付かないようにすることがか。

やっと明日は退院の日だ。

今日は日記らしい日記になるのか。

入院中、何日かは外出できたのだが、そこにはいつもまゆりがいて、口うるさく俺を心配した。

結局、すぐに病院に戻らされてベットの上だ。仕方がない、さすが

に心配をかけすぎた。

とりあえず、ダルに電話レンジの廃棄を頼んでおいた。

タイムマシン研究をしなければ、ミスターブラウンともよき隣人として

付き合っっていけるだろう。そんな考えからだ。

そうだ、ラボメンのためにピンバッジを注文したんだっとな。

退院できたら真っ先に受け取りに行こう。そして、ひとりずつ配るとするか。

退院の日はあえて知らさなかった。おそらく一人で出歩く事もできなくなるからな。

それに気恥ずかしい。むしろ、恥ずかしいから言わなかったのもある。

この日記は、おそらく今日までだろう。ラボに帰ってまで書くこととは思わない。

どこかに封印しておこうか……。そうだ、柳林神社はどうだろうか。ルカ子に頼んで、奉納とはまではないが保管してくれるように頼んでみるか。

ああ、明日が待ち遠しいぞ。



## 再会

「んー。空気が旨いな！」

退屈で長かった入院生活がやっと終わった。

何回も通った道。何も変わっていない秋葉原の街並みが新鮮に見える。

排気ガスにまみれた空気ですら新鮮に思える。

早速露天商に注文していたピンバッジを受け取り、ラボメン達に突然訪問していく。

皆、俺の退院を祝ってくれる。ピンバッジも喜んで受け取ってくれた。

本当にありがたい。俺は幸せ者だと思う。

ラボにいたまゆりとダルにピンバッジを渡して一人、街へ出てみる。

シユタインズ・ゲートがどんなものか、確認したかった。

入院中、まゆりに勧められた日記はほとんど俺の記憶を記したものになった。

知らない人間が見れば、訳のわからない中二病な日記にしか見えな  
いだろう。

しかし、書いてある内容はその世界線では事実であって、この世界  
線でも同じであるなら

俺の書いた内容は、人によっては秘密の暴露されている事。

そついえば前に、紅莉栖が頭の中を覗かれているようだと言ったな。

いかん。紅莉栖のことは心の中に閉じておこうとしていたのに不意にクリスの事を思い出してしまっ。

「ははっ。まったく俺は…。」

町並みは、フェイリスのDメールと時のように劇的に町並みを変えてしまうようなことはなく至って見慣れた秋葉原だった。

ポケットに手をいれる。

残っている、2つのピンバッジ。一つは俺の、もう一つは紅莉栖のものだ。

ガード下の横断歩道で信号待ちをしていて、これからの事をぼんやりと考えていた。

信号が変わり、歩き出す。

その横を、人が通り過ぎた。

すぐに振り返って、その人の後ろ姿を見る。

間違いない。

どうして俺は、その人がすぐに分かったのだろう。どうして俺は、こんなにも心が踊りだすのだろう。

どうして君は、ここにいらっしゃるの。

どうして君は、振り返ってくれるんだ…。

ああ、なんてことだ。

その人は目に涙を浮かべている。

「貴方をずっと探していました…一言お礼が言いたくて。」

俺を探していた？どうして…？それにどうしてまだここに…？  
いやそんな事はどうだっていい。

今、目の前にいるのは間違いなく俺の愛した紅莉栖。

封印しようとしてた、紅莉栖への思いが溢れ出してくる。  
しかし、何を言おうか迷ってしまう。

「たすけてくれて、ありがとう。」

ああ、覚えていてくれたのか。俺を。そして助けたことも。

照れ隠しに、繋がっていない携帯を耳に当てる。

そしてふいに口から、いつもの言葉が出た。

「また会えたな、クリスティーナ。」

「いや、だから私はクリスティーナでも助手でもないとずっと  
…」

「…え!？」

俺は、震えた。どうして君は覚えているんだ…  
この2つの紅莉栖へのからかいの言葉。それを君はいつも否定して  
きた。

この世界線では、君は覚えているはずがない。

そうか…俺だけだと思っていたリーディングシュタイナーは…誰も  
が持っているのか…。

記憶にはあっても、忘れているだけなのだ…

君は覚えているだろうか…俺と君とのあの3週間の思い出を。

俺は君をこの世界線を招いた。その意味も含めてこう言った。

「ようこそ。我が助手、牧瀬紅莉栖、いやクリスティーナ。」

そう言って、俺は紅莉栖にバッジを渡した。

## ラボメンとの再会

「これは…?」

渡されたピンバッチを見つめる紅莉栖

「我がラボメンの証だ、クリスティーナ」

「だから私は…」と言いかけて紅莉栖は口を閉じた。  
どうして私…この人とは会っても2回目のはずなのに…

渡されたピンバッチに目を向ける。

アルファベットの一字にMがある事に気がついた。

「このMってひょっとして…」

「…そうだ。クリスティーナ、我が助手、牧瀬のMだ。」

「どうして私の名前を!? あ…そういうえは助けていただいた時も私の名前を…」

「…何かの文献で知ったんですか?」

「いや…そういう訳ではないんだが…」

やはり、他世界線の記憶を忘れているのか。俺が牧瀬紅莉栖の名前を知っている理由も分からないようだ。どうする…。よし。

「あの、牧瀬さん…我がラボに来ないか? いや来ませんか?」

思わず、丁寧な言葉を発した岡部は自分で驚いた。

しかししょうがない。今の紅莉栖からすれば、俺はとくに親しくも無い人間になる。

確かに、命がけで助けたが。今、はっきりしている記憶はそれだけなのだ。

「えっ私が！？ちょっと…その…その前にお名前を…」  
紅莉栖はもじもじはじめた。

そうだった！

「す、すみません！私は、お、岡部倫太郎といいます！未来ガジエツト研究所の所長をしています。」

「牧瀬さん、貴方に紹介したい人達がいるんです。」

「私にですか？」

「はい！」

「貴方は、あり得ないと思いますが、貴方の記憶にこの町で僕やラボメンと過ごした日々があると思います。」

「今はそれを忘れているだけかもしれないんです」  
さすがにそのまますぎるか…

しかし、フェイリスの時の事を考えれば…。

「ええ！！えっと、あの…これってナンパ…なんでしょうか…」

「えっ？」

「えっ？あ！いやその…なんでもない…です」  
紅莉栖は顔を赤らめつつむく。

「…来ていただけですか？」俺は息を飲む。

「…分かり…ました。」

「ありがとうございます！」俺は、小さくガッツポーズを取ったと思う。

俺は、そのまま中央通りを北に向かい、ラボに向かいながら秋葉原を案内していく。

何らかの記憶を思い出すきっかけになれば、そんな期待をしつつ。

それにしても思い切ったこと言ったものだ…。まだ心臓がバクバク鳴っている。

「この上です。」

ブラウン管工房脇の、階段の前に着いた、

「あ…ここは…」

「分かりますか!？」

「あ、いえ、貴方を探している時に通ったんです。この道を。」

「そうですか…」

確かに記憶があると思う、しかしさすがに俺は期待し過ぎかも知れ

ない。

「こちらです。おい開けてくれー。」

施錠された鍵が開く音がする。オカリンはドアを開ける。

「あー！オカリンが！女の人連れてきたあー！」

「な、なんだってー！」

ドアを開けて突然まゆりとダルが驚いていた。確かに、出かけて行って突然人を連れてくる、しかも俺が女の人を連れてくることなんて

あり得ないことだ…って、おいおい。

「お前ら驚きすぎだ…この人は牧瀬紅莉栖さんだ。」

「紹介します、こつちがまゆり」

「こつちがダル」

「ちょ短かつ！オカリンそれは無くね？」

「そうだよオカリン。ちゃんと紹介してよー。」

「分かった分かった」。

「こちらが椎名まゆり、こちらが橋田至です。」

「うわ、あんまかわんねー。」ダルがぼやく。

「でも、牧瀬紅莉栖ってあの天才少女って言われている？」



「初めまして、牧瀬紅莉栖です。天才少女ってのは自分は気分よくないんですけどw」  
紅莉栖は少し笑った。

初めまして。か…岡部は顔を曇らせる。

「ほらオカリン！せっかくお客様がいらっしやってるのに、そんな顔しないの！」

「…ああすまん、まゆり。」

「じゃ、私案内します）」

「ちよっ、おいまゆ…」

言うが早いか、まゆりは紅莉栖を引っ張りラボの中を案内し始めた。

「そういえば…紅莉栖がここに来た時もそうだったな…」

紅莉栖はまゆりとラボの中を見て回っている。俺は、紅莉栖を眺めていた。

ふとした拍子に目が合ったが、すぐに紅莉栖は反らした。

あれは？困惑しているのか？よくわからない。

そうだ…今までの俺が体験してきた事をすべてここで話したらどうだろうか…

しかし、それに対するリスクもある。

「なあオカリン。」

突然ダルが話しかけてきた

「ん？どうした？ダル」

「何かさ、牧瀬氏と初めて会ったと言うか、わりと知り合いだった？ような気がするんだけど。」

雷に打たれたかのような衝撃が体を走る。

「本当か！ダル！」

「いや…普通あり得ないと思うんだけど、何かこう…つぎはぎな記憶があるんだよね。デジャヴ？って感じ？」

「そうか…」

やはりこれは話すべきなのだろうか。

俺が何も考えずにとった行動で、まゆりが死ぬ世界線になった。

まゆりの死に追いやる世界線から逃れ、紅莉栖を助け、今のシユタインズゲートにいる。

何人もの思いや記憶を犠牲にして、自分の思い通りの世界にした。

確かに、デイストピアや世界大戦も一応回避できた。

正確には確定した未来から回避出来たわけだが…

…

「オカリン？どしたん？」ダルが顔色をうかがう。

「しかし…どこまで話せばいいのか…難しいな…」

「また訳の分からない事を…」ダルが呆れ顔になる。

むしろ、思い出して欲しくない記憶もある。

特にまゆりには、救うためとは言え何度も死を体験させているからだ。

ラウンダーから殺される記憶を思い出させて

それが現実起きた出来事だと認識させるのか？

そんな事出来るわけがない。

「うふふ楽しいなー」

まゆりは紅莉栖をラボ内一通り案内して

紅莉栖をソファーに座らせた。隣にまゆりも座った。

「となると、まゆり以外に話すか…いや、話すラボメンを限るか…」  
答えが出ない。

「あ、あの！」突然紅莉栖が声を上げた。三人が紅莉栖に向く。

「私…以前ここに来た事ありませんか？」

ダルと俺は目を合わせた。

「それに、まゆりさんにも会った事があるみたい…」

「あーごめんなさい、そんなはずが無いわね。私っただろうかして  
る……」

紅莉栖はうつむいてしまった。

よし、ここはあれだ！

「フーハハハ！」

皆が岡部を見る。

「脳科学研究者、天才少女牧瀬紅莉栖！、いや我が助手クリステ  
ーナよ！」

今、お前の状況をお前の頭脳で説明してみるがよい！」

「いや、だから私は助手でもクリステーナでも無いと言っ  
ころうが！」

「あーまた！私っただら……」

今度は、まゆりとダルが目を合わせた。

「あれ…あれ？」

まゆりが頭に両手の人差し指を当てて一休さんのように記憶を辿る。

「…クリス……クリス…紅莉栖ちゃん？」

まゆりは、座っている紅莉栖に飛びこんだ。

「え、ちょっと！まゆりさん！」

「良かった！良かったよ紅莉栖ちゃん…いなくなっただろうかと思っただよ…」

抱きあう二人を見たダルはゆるぎない。

「おおー！百合フラグキタコレ！」そしていつものようにたらつと鼻血を出した。

「何言ってるのよ！橋田の変態！」

「ごごめんなさい！初対面なのに変態なんて！」

「もおおお！ど、どうなってるの私！」

突然口から出た言葉に紅莉栖自身が困惑している。

そして、ダルが驚いた顔を岡部に向けた。何も言わないが言いたい事は分かる。

「さすがにこのまま何も話さない訳にはいかないか…」

「ほら、まゆり、助手が困ってるぞ。」

「あ！ごめんなさい…紅莉栖ちゃんと離ればなれになってもう会えないって思ってたから…  
あれ？でもなんでだったかな…」

「え、それってどういう事…」

「それは俺から話そう。」

深く息を吸い、そして吐く。

「今から、俺が話す事はすべて真実だ。心して聞いてほしい。」

いつものオカリンとは違う真剣な様子に、まゆりとダルは身構えた。

紅莉栖もただならぬ、雰囲気を感じて真剣な表情になった。

俺は、おおよそ、3人に関連する事を話した。

初め、紅莉栖が死んだ世界線があったこと。

そこから、まゆりが死ぬ世界線になってしまったこと。

また世界線を戻して、死ぬ収束に陥る紅莉栖を助けたこと…。

話し終えた時、時刻は昼過ぎから夜になっていた。

しばらく、3人とも無言のままだった。

紅莉栖は口を開く。

「本当にすべて真実なら…デジャヴだと思ってたこの記憶は、デジャヴじゃないんですね…」

「完全に残ってる訳じゃないし、記憶喪失のような感じかしら。」

「記憶があつたのか？」岡部が驚く。

「ボンヤリですが…でも間違いなく有るみたいです」紅莉栖が答

えた。

「私は紅莉栖ちゃんの事、ちゃんと覚えてるよ！」

「一緒にシャワー浴びたもん、それをオカリンに覗かれて…」

「ええええええ！！？」紅莉栖が驚く。

「ああ…まゆり…余計な事を…。」岡部はうなだれた。

「あと…オカリンが私が何回も助けようとした事も…夢かと思っ  
た…」

「！…！…すまん。まゆり…辛い事を思い出させてしまった。」

「ううん…私は今生きているのはオカリンのおかげだもん。」まゆ  
りは岡部に微笑んだ。

「そうか…ありがとうまゆり。」

「オカリン…」突然ダルは目の前に立ち両肩に手をおいてダルが話  
しかけた。

「無茶しやがって…あんた…輝いてるよ…。」

「ははっ、よしてくれダル…でも信じてくれて嬉しいぞ。」

ラボの4人は、世界線の移動を経て再会を果たした。

しかし、完全に記憶が戻った訳では無いし、戻らない部分もあるだ  
ろう。

俺はそれでいいと思った。

これからまた積み重ねていけばいいのだから。

ふいに涙が溢れた。

「ちょ、オカリン…泣いてるん？」ダルが驚く。

「な、泣いてなどいない！」

「この、希代のマッドサイエンティスト鳳凰院凶真が泣くなど！」

「ほら…オカリン…泣きたい時は泣けばいいんだよ…」まゆりはタオルを渡した。

「す、すまん…」

俺は、カーテンの隙間から研究室に飛び込んだ。そしてカーテンを閉めて腹の底から泣いた。

「オカリン…マジ辛かったろうな…」ダルが溢す。

「そうね…岡部さん自身が事の発端かもしれないけど自分ですべての責任を負って、世界大戦を回避するためとは言え、私を命がけ救ってくれて…」

「それはちょっと違うよ。紅莉栖ちゃん。オカリンは何も言わなかったけど…」



「え、何か違うの？まゆりさん」

「うー…うん。ごめん、なんでもない。あ、あとまゆりでいいからね（、）（、）」

まゆりは紅莉栖に微笑んだ。

「ほらーオカリン、いつまで泣いてるのー」まゆりは研究室に入る。

俺は、椅子に腰かけ顔を覆うようにタオルを被せてむせび泣いていた。

「ああ……すまない……まゆり……」

「ううん…オカリン良かったね……」

「ああ……」

背中に暖かいぬくもりを感じる。背中からまゆりに抱かれているようだ。

「まゆ…り？」

「ちょっとだけ…このままに居させて……」

何秒か経ったのかわからない。頭の中では、思考がぐるぐると回転している。

「オカリン……」

「…何だ？まゆり」

「…ううんなんでもない…よし、ほらほらもう泣き止んで！」大声を上げて、背中を叩く。

「いった！まゆり痛いだろ！」

「あははは」まゆりは笑っている。

そうだ、俺はこの笑顔を見るために…

確かに紅莉栖への思いは依然としてある、いやむしろ会えた事で閉じようとしていたものがまた飛び出してしまった。

本当なら…今すぐにも抱き締めたい。

しかし、それはかなわない。記憶があるとは言え、あの時の紅莉栖では無いのだ。

「…もう大丈夫だ、まゆり…ありがとう」

「エへへ…良かった。」

二人揃って研究室から戻った。

**岡部とまゆりと紅莉栖（前書き）**

この話では、岡部とまゆりです。

## 岡部とまゆりと紅莉栖

「もうこんな時間か…」

研究室から戻った岡部はいつの間にか過ぎた時間に驚く。

「クリステイーナはホテルか？」一応でも記憶が戻った部分もあるのであえて、テイーナ付けをした。

「またテイーナ…テイーナも禁止って以前言いましたよね？」

「…ふふっそうだったな」自然と笑みがこぼれる。覚えてくれた事が嬉しかった。

「そうね、ホテルに戻ります。まゆりさ…まゆりはどうするの？」

「私はここに居るよ。ラボに居候させてもらってるんだ。」

「え！？ここって…大丈夫なの？」

「助手よ、何の心配をしている？」

「助手言うな！男二人に女の子一人にさせられないでしょ！」

「大丈夫だよー、オカリンとダル君は。変態だけど、紳士だもん。それに、わりとしっかりしてるんだよラボ。」

ラボはまゆりの居候生活のために、まゆりの居住空間とセキュリティの向上を図った。

この件には、スポンサーがいるがそれは俺しか知らない。  
俺は入院していたが戻ってみればちょっとしたシエルターができていた。

あいつも友達思いの奴だな。

それにしても変態だけど紳士…変態紳士。結局、変態ではないか。

「そうだな…ダルはどうする?」

「うーん…ちょっと帰ってやりたい事あるんだよね。」

「そうか」

じゃ、とりあえず俺はクリスティーナを送っていく。

「はい!?べ別に送って貰わなくてもいいですけど!」

「人の厚意は大人しく受け取っておくものだクリスティーナ。それが可愛げがあるってものだ。」

「ググ…こ、この…」紅莉栖は肩をいからせてわなわなしている。

「分かりました!」紅莉栖は玄関に向かい靴をはく。ダルとオカリンも続く。

「まゆり、戸締まりはしっかりするんだぞ!知らない人が来ても無視しろ。いいな。」

「分かってるよオカリン。ちゃんと防犯カメラで確認します」

）  
「ん」

「よし。じゃ俺も助手を送りがてら帰るから。また明日な。」

「…うん。」少し寂しげな表情するまゆり。

「？どうした？まゆり。」

「ううん！ほら早く紅莉栖ちゃん送ってあげて。」

「ああ。」

オカリンはドアの外に出て、まゆりが鍵をかけるのを確認した。

「よし、ではいくか。」

振り返るとすでに紅莉栖はいなかった。

「おおい！クリスティーナ！」

紅莉栖はすでに階段を降りて、スタスタと歩き始めていた。

「おーい、クリスティーナ！！」紅莉栖は立ち止まり、振り向く。

「クリスティーナってどなたのことかしら？」また歩き始めた。

「おおい！、分かった紅莉栖！牧瀬紅莉栖さん！」立ち止まり振り向く。

「別にさん付けは、いいわよバカ」

「こ、この！」腹が立ったが、その感覚にすら嬉しさを覚える。それにいつの間にか、失ったと思っていた紅莉栖とのやりあいがまた戻ってきた。

「…ふふっははは！」

「な、何がおかしいのよ！」

「いや、嬉しいのだ。」思わず本音が出てしまう。

「ちよつと、何を言ってるのよ…」

クリスは顔が赤くなるのを覚え、すぐに前を向いて歩きだす。

何か調子狂うわね…私の思い出しかけた記憶じゃこんな事言う男じゃ…

「お、おい！紅莉栖！」

突然腕を捕まれて、引き込まれる。紅莉栖は頭を岡部の胸元にぶつけた。

岡部の腕はクリスの背中を優しく包み込む。

「は、はい！？」クリスが驚いた拍子に、車が勢いよく走り去った。

「危なかったな…紅莉栖。信号ぐらいちゃんと…」

ドン！紅莉栖は岡部の胸を突き飛ばした。

「何よもう！あんたといると調子が狂うのよ！」

「何を！？助けてもらっておいて何だその言いぐさは！クリスティーナ！」

「だからティーナ付けるなど…」クリスは途中で口を閉じた。そうだった…この人は私を命がけで助けてくれたんだ。

紅莉栖はうつつ向いてしまった。「…ごめんなさい言い過ぎました…」

「ん？どうしたクリスティーナ？お前らしくない、我が助手ならもつと元気よく反論してこい！」

「えっ！？…ふふっあはははは」紅莉栖は笑う。

「あなたって本当に馬鹿ね。」岡部に向かって笑みをこぼした。

「よし、それでこそ紅莉栖だ。」岡部も紅莉栖に笑みを見せた。

歩きながら、漫才かのような言い争いを続けているうちに気がつく  
とホテルに着いていた。

「さて、着いたわね。ありがとう岡部さん。」

「当然だ、我が助手よ。」

「助手じゃないって…私は言ってるだろ？」紅莉栖は岡部をにらみつけた。



「う、ごめんなさい！っていうかさん付はやめてくれ」岡部は謝りつつ、紅莉栖に言う。

「岡部って呼んで欲しいとでも言うんですか？」紅莉栖は腕を組み上から目線で言った。

「そつだ」岡部はキツパリと答えた。

「な、ななな…」紅莉栖は、岡部の態度にうろたえる。

「…紅莉栖…明日もラボに来れるのか？」

「何よ、来て欲しいの？」

「ああ…来て欲しい。」

「は、はいつ！？」あまりにストレートな返答に紅莉栖は動揺する。

「だめ…か？」

「べ、別に一応は予定は無いけど…」

「いいのか？」

「分かったわよ！」結局、紅莉栖は、明日もラボに行く事になった。

「そうか！ありがとう紅莉栖！また明日な！」岡部はにこやかに浮

き足立った声を上げて、帰宅の途につく。

紅莉栖は、岡部が来た道に戻っていくのを見ていた。

「今日会ったばかりなのに、別の世界線の記憶のせいかなれなれしい感じがしない。どこか、懐かしいような楽しい感覚…」

紅莉栖には、明日もラボに行く事に何の抵抗も無かった。  
フロントに向かう。

足取りも軽く、岡部は帰路についていた。

ラボにはまゆりが居る以上、徹夜の研究とはいかない。  
むしろ、実家に頻繁に帰る事で健康状態がすこぶる良くなった。

着信が入る

ん？まゆりか…

「どうしたまゆり？」

「オカリン？…今どこかな？」明らかに元気の無い声だった

「今、駅にいるが…どうした？」

「ん…ちよつとね…」

「何かあつ…」岡部は気がついた。ひよっとしたら…

「ラボに今すぐ行く。」

「え!？」

「ちょっと忘れ物を思い出した取りに行く。」

「う、うん分かった…」切るが早いのか、岡部はラボに向かって走り出した。

インターホンを鳴らし、防犯カメラを見る。ドアから複数の開鍵音がする。

「入るぞーまゆりー」出た時とは違い、ラボの中はシャンプーか何かのいい香りで充満していた。

脱衣室からまゆりが出てきた。

子供の頃なら見なれた寝巻き姿だが、さすがに今となっては色々つまズイ。

自然と視線が壁に向かう。

「?オカリンどうしたの?」

「あ、いや何でもない…」

「忘れ物は?」

「忘れ物ならここにあるではないか?」岡部はまゆりの少ししつと

りとした頭を撫でた。

「…オカリン…ごめんね…分かつちゃうよね」

「何を言ってるまゆり…俺の責任だ」

まゆりにある、何回も何回も殺された記憶。

その中には、人体実験の被験者にされた記憶もあるだろう。記憶がもしすべて存在していたとしたら今のまゆりのように正気を保っていられるだろうか。

俺は、まゆりを助けるためにがむしゃらだった。

しかし、どこか作業的になっていなかっただろうか？

まゆりのため。しかし、本当にまゆりのためだったのか。いや、俺がまゆりに死んで欲しく無かったからだ。

まゆりは謝る必要なんてない。謝るのは俺の方だ。

まゆりは目に涙を溜めている。駆け寄って岡部を正面から抱き締めた。

「ま、まゆり…！」まゆりが小刻みに震えているのが分かった。

岡部はそれを押さえ込むかのようにまゆりを抱き締める。

「まゆり…大丈夫だ…俺が居る…」

まゆりに染み付いた死の記憶がこんな言葉で晴れるとは思わない。しかし何かを言わずにはいられなかった。

少しずつだが、まゆりの震えが収まってきた。

…ふう…まゆりがため息を漏らす。

「ありがとうオカリン…」

「…あのね…一つお願いしてもいい？」

「何だ？言ってみる」

「一緒に寝て欲しいかなって…」

「はい？」一緒に？寝る？一瞬何の事が分からなかった。

一緒に、同じベッドで？って事か？

「いやいや待て、ベッドって…」岡部は目をやる。

「あれ…だよな」どう考えても、シングルです本当にありがとう…  
ざいました。

大丈夫かな俺…いや普通大丈夫な訳が無いと言うか…

「ぐっ…むう…」

「駄目…かな？」

「いや…」まゆりを覗き込む。

そこには涙で目を一杯にしたまゆりが岡部を見上げていた。

「…分かった。いいぞまゆり」

「本当！？ありがとうオカリン…」

ザー

「どうしてこうなった…」岡部は熱いシャワーを浴びながら考えていた。

状況を考えたら、まさに行為に至る流れに間違いない。

「いやしかし、幼なじみだぞ？それに…」紅莉栖の笑みが脳裏に浮かぶ。

「いや、ひよっとしたら…シャワーから出たらすでに寝ていたってオチもある」

「そうだ、そうに違いない！」意味の無い事を考えつつも、何故かいつも以上に体を洗う岡部。

…

「さすがに長いか…」

いつもならすぐにシャワーから出るが、2倍の時間をかけた気がする。脱衣室に出た。

「もーフェリスちゃん！そんなんじゃないって！」

（ん？電話か？）

「オカリンと一緒にラボに泊まるけど…」

（ちょ！おま！何を話してるんだ！）

「フェリスちゃん！内緒だよ！絶対だからね！」

（…フェリスに言って内緒になる訳が無いだろう…）

ラボに置いてあった服に着替えて脱衣室を出る。

「あ！フェリスちゃん！切るよ！またね！」

「…フェリスと話をしたのか？」

話は聞こえていたが、聞こえていない振りをする事にした。

「う、うん…明日のバイトの事でちょっと…ね」

明らかに拳動がおかしい。まゆりは嘘がつかない。

そうか…。じゃそろそろ寝るか。

う、うん…

（ああ…明らかに意識している…フェイリスめ…）

さて…このベッドにどうやって二人寝るんだ…

とりあえず、まゆりは壁側だな

(ベッドは壁にくっついていてまゆりが奥なら落ちる事はないだろう。)

「うん、分かった…」先にまゆりが入る。

まゆりは壁を向いた。

(と、なると…背合わせか)

岡部が入る。

背中合わせでも、まゆりの背中から柔らかな感触と温かみが伝わる。が…落ちた。

「…大丈夫?…無理しなくてもいいよ?」

さっきの震えていたまゆりを思い出す。岡部は覚悟を決める。

「まゆり…ちょっと頭上げてくれ」

「え?こっ?」

まゆりの上げた頭の下に腕を通す

そのままベッドに入り、まゆりの体をおおつように岡部は横たわる。

2人羽織のまま横に倒れた感じになる。

「ヒヤッ!」まゆりの体が、ビクッと動く。



「だ、大丈夫か？まゆり？」

「う、うん……」

まゆりは一体どんな顔をしているんだろう……

俺もどんな顔してるのだろうか……

それにしても……いい匂いだ……とても柔らかいな。

……

……ああそういえば、理性って、脳科学でなんて説明するんだろう。

「……お、オカリン！ちょっと苦しいよ……」

「はあ！すまん！」いつの間にか抱き締めていた。

「ふう……」まゆりはため息をつく

「オカリン……？」

「何だ？」

「……実は最近、夢にうなされて起きちゃったんだ……」

「……そうか……」

「でね、あれは夢じゃ無かったんだ……って今日知ったらものすごく怖くなっちゃって……」

「でもね…オカリンは何回も私を助けようとしてくれたんだよね？」

「ああ…だけどそのせいでまゆりを何回も…」

「ううん…いいよ、ありがとうオカリン…」

「オカリンに抱かれてるから、怖いのもすぐ消えちゃっよ」

「それに何回起きても、何回も幸せな気分になれるねエへ…」

「そうか…よかった…」

「でねオカリン…毎日って言わないけど…」

「ああ…いいよまゆり」

「ありがとう…オカリン…」まゆりは岡部の左手を両手で握る。

「オカリンの手大きいね…」

「そうか？」岡部は右手でまゆりの頭を撫でる。

「うふふ…オカリンに聞きたい事あったけど…」

「何だ？」

「もっ…いいや…」まゆりの意識がまどろんでいるのが分かる

「オカリン…おやすみ…」

「ああ、おやすみ、まゆり…」

何回も助けようとして助けられなかったまゆりが、今、目の前で静かに寝息を立てている。

「ふー…」大きな幸福感を感じつつ岡部も眠りについた。

## ホテルの紅莉栖（前書き）

ラボの岡部とまゆりと同じ時系列です。紅莉栖視点といえればわかりやすいでしょうか。

## ホテルの紅莉栖

「ありがとう」

紅莉栖はホテルのフロントで鍵を受け取り、エレベーターに乗る。

「明日も来て欲しい…か…」岡部に言われたくすぐったい言葉が紅莉栖の頭の中でリピートされていた。

「なんだろう…とっても嬉しいな…」

初対面では無いにしろ、一生懸命探した相手が私とまた会いたいと言ってくれた。

「探している間、何回も岡部の事を夢で見してきたしひよっとしたら、岡部は私にとって特別な人なのかも…あははwなんてねw」

ゆったりとシャワーを浴びた後、もう何食食べたか分からないカツラーメンにお湯を注ぐ。

「美味しいけど、さすがに体に悪い気がしてきたわね」

時間通りに待ったラーメンを食べ始める。

「…ふう、美味しかった」

スープまで飲み干して完食した。

携帯を開けて、スケジュールを見る。すでに帰国予定は完全に過ぎていた。

携帯に入っていたメールを見る。

「え！…う、ん…」

そろそろ帰らないと、研究室に席が無くなるかもと言う旨が書かれたメール。

「先輩も頑張ってくれてるものね…」

一度は帰国したものの、とうに過ぎてしまったアメリカへの帰国の予定を、自分の父親が起こした事件の事もあり、先輩の助力もあり、伸ばしに伸ばしたのだった。

「でも…」

今日見たラボの自分にあつた断片的な記憶が、実は現実だったと知った。

アメリカの研究室よりも幼稚だが、とにかく居心地が良かったと言っただけの確かな記憶がある。

それは、今日訪ねた時に明確に思い出せた。

ベットに寝転んだ紅莉栖は、目を閉じて何か方法は無いか考える。

「…今の自分があるのは、間違いなくアメリカの生活があったから

もし日本に生活の拠点を移すなら、しっかりと計画を立てないと…」

「やっぱり一度帰った方がいいかな…」

日本での生活、ラボを含めた生活をぼんやりと思い浮かべる。

「ああ…やっぱり楽しそうなイメージしか沸かないわね…」  
と、そこに岡部の顔も浮かぶ。

「ちょ！ちよつと、何を考えてるのよ！私ったら…まったく、岡部のせいよ！もう！」

八つ当たりをしつつ、紅莉栖は顔を赤らめた。

「はあ…帰りたくないけど…とりあえずアメリカに戻って、もっと前向きな計画を立てよう。」

紅莉栖は、数日後に日本を出国する予定を立てた。

「明日は、とりあえずラボに行って、明後日は出国の準備や挨拶に回ってと…」

ちよつとバタバタするかな。」

携帯にスケジュールを打ち込む。

「よし。これでいいわね…それにしても…今日はとてもいい1日だったな…」

紅莉栖は静かに眠りに落ちた。

「…んっ」

紅莉栖は何か自分の唇に感触を覚えた。目の前には…岡部の顔？…

「え？この状況って…まさか…」

「えええ！？ちよっとどういう事よ！…」

「何で、わた、わたしが岡部と…」

岡部が何を言っているのか分からない。しかし何故か岡部が腰に手を回してくる。

逃げる意志が何も働かない。むしろ、自分の体に逃げる意志が無い。

「えっ、ちよっとまって！また！？」

「やつ、あっ…」唇に岡部の唇の感触が伝わる。そこから体中に暖かいものが伝わる気がした。

「…はあ…これ…夢よね…でもものすごく現実的な感じ…」

「岡部と抱き合ってる感触まである…」

「まさか…これって現実にあった記憶なの？」



!!!!!!

「…そうだ…私…岡部にあのラボで好きって言われたんだ!」

突然、別の映像に切り替わる。

「え、今度は何?ここは…秋葉原駅のホーム?」

私、荷物を引いている…何でこんなに悲しいんだろ…

突然、心に熱い物が生まれ、寂しい心はかき消された。

何…ものすごく心が熱い…来た道を、なりふり構わず疾走する。

「この道は…ラボへ行くの?」自分でも驚くほど全力で走っていた。

「あと少し…あと少しよ…」

階段を上がり、ラボのドアを乱暴に開ける。

まさに今、紅莉栖の口から出ようとする言葉に気がつく。

「…えっ、ちょっと何を言いつつもり!」

私も岡部の事が…

「ちょっと、ちょっと待って！ええええ！？」

っ！！！！

飛び起きた紅莉栖。

自分の状況を確認するためにあたりを見回す。

「間違いない…ホテルの部屋…」

「なんて夢をみるのよ…私ったら…」

「…ううん違う…夢なんかじゃないんだ…」気がつくとも全身汗をかいていた。

「…シャワー浴びよう…」

ザー

シャワーを浴びながら、ついさっき見た夢を思い出す。

「岡部に好きと言われて…キキ、キスしちゃって…わわわわたしも岡部の事が？」

走っていた時の鼓動とは違つ心の高鳴り。

「そうか…私も岡部の事が好きだった…の？」

「ああもう！何よ！馬鹿岡部！私の心をこんなにもちやくちやにして！責任取れよ！！」

シャワールームで一人叫ぶ紅莉栖

シャワーから上がり、鏡に自分の顔を映す。

「…貴方…本当に岡部の事が好き…なの？」

心に岡部の事を思いほほえんでみる。見たことの無い笑顔が鏡に映る。

「…はあ…我ながら何て笑顔よ…」少しうなだれる紅莉栖。

「もう…間違いないわね…」バスローブを羽織り部屋に戻った。

ベットに横になつても岡部との記憶が頭から離れない。

それどころか、岡部とのキスばかり何度も頭の中で流れている。

「自重しろ！私！お願いだから！…このままじゃ…私…おかしくなっちゃう」

ベットの上で、のたうち回る紅莉栖。

「だめだって、もうお願い！私！」

ピピッピピッピピッ

「はっ！！？？」

携帯のタイマーが鳴った。遮光カーテンで日光は指さない。すでに朝らしい。

タイマーを止めて時間を確認する。

「…まだちょっと早いけど…ラボに行こうかな…」

またかいてしまった汗をシャワーで流して、いそいそと身仕度をする紅莉栖。

いつもよりしつかりと整えているが、それにはまったく気がついていない。

「朝は涼しくて気持ちいいわね」

ホテルから出た紅莉栖は、足取り軽くラボに向かった。

カン、カン、カン…階段を上がる紅莉栖。

「ふう…」

自分の身仕度を確認した紅莉栖はドアの前に立つ。

一呼吸置いて呼び鈴らしいボタンを押した。



## 涙

ピンポーン！

岡部は目を覚ます。が、目前にまゆりはいなかった。

「はいはい。」ガチャガチャ…

…まゆりがドアの鍵を開けている…？オオイ！？

「おはよう、まゆり。」

「紅莉栖ちゃんおはようートウツトウルー」

…考える考えるんだ…

この状況、俺は紛れもなくまゆりのベッドで寝ている。

ここからの移動は…不可能…つまり…オワタ…

とりあえず、寝ているフリだ…

「…！お！岡部…！！…なんでここに…！！」

紅莉栖の当然の反応。

「シー、オカリンはまだ寝てるから起こさないで欲しいのです。」

「あ…うん…そうね…」

二人の会話の音量が下がるが、雑音が無いのでまるつきり聞こえる。

「昨日、怖くなってオカリンに来てもらったんだ…」

「あ…別の世界線の記憶？」

「そうなのかな…撃たれたり、何かされて倒れちゃう記憶…」

「ふー、想像もつかないわね…辛いわねまゆり大丈夫？」

「うん…記憶だとオカリンが、必死にまゆしいを助けようとしてくれるんだ…」

「…そう」

「あのね…紅莉栖ちゃん…」

「何？まゆり」

「オカリンね…今も紅莉栖ちゃんの事が好きなんだよ？」

岡部は飛び起きそうになる。

「はい！？な、え、ちょっと…」紅莉栖は頬を赤らめ混乱している。

「何言ってるのまゆり、昨日一緒に居たんでしょ？岡部と」

「まゆりの事を思っているのは分かるけど、私の事を好きって…」

「うん、オカリンは話さなかつたけど紅莉栖ちゃんを助けるとき、一度失敗しちゃったんだ。  
でもね、失敗したオカリンはダル君と、タイムマシンを作っちゃうんだ」

「…そうなの…覚えてたのね、まゆり」

「うん。失敗した時のオカリンは本当に落ち込んで…辛そうだった…」

「でもまゆしいが思いっきりひっぱたいて、目を覚ましてあげたの。でね。」

未来のオカリンからメールが来てて、またタイムマシンで紅莉栖ちゃんを助けに行っただよ。」

「うん…岡部が守ってくれた…」

「オカリンが入院してた時は、とても穏やかだったけど何か寂しそうな感じがしてた。でもね…」

「紅莉栖ちゃんと一緒にラボに来た時のオカリンは目が輝いてて…とっても嬉しそうだった。」

「…私はオカリンには輝いて欲しいのです。だから、オカリンと紅莉栖ちゃんには一緒に居てほしいなって…」

「まゆり…」



「紅莉栖ちゃんはオカリンの事好き？」

「えええ！？ちょっとそんな…なんて言うかその…」

「んふふー赤くなってるよ紅莉栖ちゃんw」

「もう！まゆり！」

「あははは、でもね…オカリンが紅莉栖ちゃんと一緒になっても…」

「本当にたまにでいいから、オカリンに甘えてもいいかな？紅莉栖ちゃん…」

「そ、それは…」

しよげてしまつまゆり。

「うーん…良いわよ！まゆり。」

「ありがとう！紅莉栖ちゃん！」まゆりは紅莉栖に抱きつく。

「私、オカリンも紅莉栖ちゃんも大好きだよ！（ ）（ ）」

「まゆり…」紅莉栖はまゆりを支えるように抱きしめた。

まゆりは、紅莉栖から離れて懐中時計を見る。

「あ…もうバイトに行かないと…」

「もう？まだ昼前だし早いじゃない」

「今日は開店前からお仕事なのです。」まゆりは鼻息荒く答える。

「そ、そう大変ね。頑張つてねまゆり。」

「ありがとう紅莉栖ちゃん！じゃ行ってきまーす！」（ぐんぐん）

ガチャン！

岡部はドアを閉める音を聞く。

さて…いつ起き出すか…話を全部聞いてしまったのを悟られないように…

「おい！岡部！」「ドカッ！

背中辺りに衝撃が走る…蹴られた？

「たぬき寝入りしてただる岡部！」

岡部はベッドから起き上がりベッドに座る。

「…すまん」

「ちっきのまゆりの話は聞いてたでしょ」

「ああ……」

「あんだね……前に聞いた話だと、岡部はまゆりを助けるためにDメールを解消してきた訳よね？」

「ああ……紅莉栖にも相談してIBM5100をまた手に入れるためだ……」

「そこに至るまで、どれだけの人の思いが犠牲になったか自覚してるわよね？」

「……もちろんだ。俺がDメールの実験と言って招いた事、俺の責任だ」

「その……一番最後は……一番始めのDメールの影響を受けた私だった」

「まゆりか私か、岡部は一度選んだはずよね。……まゆりを」

「そうだ……二人を同時に救う手だては無かった。紅莉栖を犠牲にしてまゆりを助けた。」

「その後タイムマシンが現れた……」

「（身が引き裂かれそうになる……一度別れた後にラボのドアを開けて息を切らせて戻ってきたクリスが脳裏に浮かんだ）」

「岡部は、まゆりに本当に大切に思われてるのに……岡部だってまゆりを大切に思ってるのに……」

「それなのに、本当に私の事が好きなの？」

「…そうだ、俺は紅莉栖が好きだ。」

紅莉栖は震えている。

「そんなの！そんなの都合が良すぎるじゃない！！」

岡部はハツとする。

「岡部は一度、私のことを諦めてまゆりを助けたのよ！私が助ける手段は後から現れた！」

「私を助けられたからって！私の事を好きって！…まゆりはどうなるのよ！」

紅莉栖の目が大きく開き、ポロポロと涙を流した。

「…ぐっ…ふっ…ぐす…」 紅莉栖は泣きながらはなす。

「…岡部が助けてくれた後…気がついた時、私は血まみれだった。でも、私はほとんど無傷だった…」

「血はすべて岡部のだと分かった時、ひよっとしたら死んじゃったかもって思った…」

「必死に探したわ…」

「前からね…岡部の事は夢で見てたの…」

「あの人はひよっとして…私にとって、ものすごく大切な人なんじゃないかって…」

「また会えた時は本当に嬉しかった…」

「あの…別れた時の事…覚えてる？」

「ああ…忘れる訳が無い…」

「昨日ね夢をみたの…空港に向かっていた途中かな…  
私馬鹿ね…あんたに私の気持ちを伝えてない事に気がついて  
無我夢中で走り出した…」

「ラボに着いて、岡部に伝えようとする夢から覚めたわ…」

「ああ…俺が、まさに紅莉栖を消そうとしていた時だ…」ふいに…  
涙が溢れる…」

「あの時は…すまなかった…」堰を切ったかのように涙が止まらな  
い。

「…岡部…あなたは、まゆりを選んだはずの人…でも私は…あなた  
の事が好きなの！」

「う、うううう…まゆりがいるのに私は…岡部が好きなの…」  
紅莉栖の目から涙が次々と溢れ落ちる。

「紅莉栖…お前が言うことは間違っていない…」

「しかし！紅莉栖が何を言おうと！誰に何を言われようとも！紅莉

栖！俺はお前が好きだ！！」

紅莉栖は、目を見開いて岡部を見つめる。

「…馬鹿！この馬鹿岡部！！」紅莉栖は岡部を睨みつける。

しかし、紅莉栖は泣き顔に変わり岡部に近寄る。

そして、ボロボロに涙を流す二人が、お互いが歩み寄り、抱き締め合った。

「…好きだよ岡部…」

「俺も好きだ…紅莉栖…」

別の世界線からの本当の再会。二人は泣きながら抱き締め合った。

「よかったね…オカリン、紅莉栖ちゃん…」

まゆりはラボのドアにもたれて二人の会話を聞いていた。まゆりも泣いていた。

抱き締め合う二人は次第に落ちつき、お互い見つめ合う。

何の合図も無く、数回たどたどしく唇を重ねた。

「…はあ…」クリスから暖かい吐息が漏れる。

気恥ずかしくなり、お互いその場から離れてしまふ。

クリスは自分の唇に触れ、岡部と唇を重ねた事を確かめた。

「…まったく…この馬鹿岡部！」

「な！？なんだ！クリスティーナ！」

「だからティーナ付けんっての！まったく何で私、こんな男を好きになっただんたろ！」

「それはこっちのセリフだ！」

「何おう！？この変態中二病！」

「なーんーだと？この変態天才少女！」

「何だと！？？」

「何だよ！？？」

「ぷっ…ふふ…」「くっくく…」

「あはははははははははは！」「二人の笑い声がラボに響き渡った。

「もう、相変わらずね私達。」

「でも俺は楽しいし、嬉しいぞ。」

「なな!？」紅莉栖は顔を赤らめる。

「もう…またそついう事言う…貴方そんなキャラだった？」

「な、何を言う。ただ…今を大切にしたいだけだ。」

紅莉栖は、はつとする。

「岡部が言つと、ものすごく重みがあるわね…もちろんいい意味でよ。」

「誉めるな、気持ち悪い。」

「んな!？せつかく感心してやってんのに!やっぱりあんたムカつく!」

「何をう!」

「…あつと…。話したい事があるの。」クリスが制止する。

「お、おつ…」岡部は落ち着く。

「まゆりはどうするの?」クリスが唐突に切り出す。

「どじするって…」



「まゆりは岡部の事を大切に思ってたけど大切になって、何か抽象的な表現ね。」

ストレートに言えば、まゆりは岡部の事好きよ」

「な、なに!？」

「更に言えば、岡部もまゆりの事好きよね？」

「な、な、何を言ってるんだクリスティーナ！」

「ティーナ付けんな。ま、かなり動揺してるみたいだし凶星みたいね。」

大切になって言うのは、愛情として高いレベルだと思うけど

大切に思っ行動って、相手によっては重荷に思われる事もあると思うのよ。」

「う、む…確かに、まゆりも自分が重荷になっていると言っていたことがある…」

「…だから、どうしろと?」

「単刀直入に言うと」

「岡部、まゆりと恋人同士になりなさい。」

「!!!」ドアの外で聞いていたまゆりは驚きのあまり声を上げそうになった。

(何を言ってるんだろうか…このスイーツ(笑)は)

(ついさっき、俺は紅莉栖が好きだと言った。紅莉栖も俺が好きだ

と言ってくれた)

(で、この状況だ)

「…今北産業。」

「私は岡部が好き。

まゆりも岡部が好き。

両手に花。」

「な、なにをおー!!」

「なんだよ。」紅莉栖は岡部を睨みつける。

「ク、紅莉栖！お前何を言ってるのか分かってるのか!」

「分かってるわよ。これなんてエロゲ？ね。」

「…だめだこいつ…早くなんとかしないと…」

紅莉栖は一呼吸置いて話します。

「あのね、私はまゆりも大切だし何ていうかまゆりに愛情が沸くの。

まゆりは私と岡部がうまくいくように、どこか一步引いているというか、引こつとしているのよ。」

「まゆりとはいつも以上に付き合っていきたいし、まゆりにも幸せになつて欲しいの。」

「あと、岡部がまゆりにしてあげる事も、恋人だからって事になれば少なくとも重荷なんて思わないわよね。」

「それに、男ならこの状況は誇っていいじゃない？  
つまらないモラルはこの際捨てるべき！ってか捨てる！岡部！」

「あと、私とも恋人同士…よ？いい？」紅莉栖は顔を赤らめてうつむいた。

「それはまあ…その…当然だ！」

「ありがとう岡部」紅莉栖は、岡部に微笑んだ。

「しかし…紅莉栖。お前、まゆりの気持ちはどうなるんだ？」

「まゆり？そうね…うーん…早い話、岡部がまゆりに好きって言え  
ばいいじゃない」

「俺が？まゆりに？」

「だから言ってるでしょ！両手に花だって！」

「紅莉栖…俺がそんな器用な男に見えるのか？」

「まったく見えないわ」

「…それを無茶振りと言うのだ…」

「うーん…困ったわね…」

二人は一緒にソファアに座り、これからどうするか考え始めた。

「…あわわわわ…」

ドアのそばで中の会話を聞いていたまゆりは、そっとドアから離れる。

ふらふらと階段を降り、千鳥足のようについにメイクインに向かった。

## フェイリス大作戦

「ほえー…」

メイクイーンに着き、働き始めたまゆり。すでに開店はしているが、ぽけーっと呆けている。

他のバイトの子から、様子がおかしいと言われフェイリスが様子を見に来た。

「どうしたのかニヤ？まゆしい」

「はやー…」

「まゆしい？…」手をまゆりの顔の前に出して振ってみる。

「だめにゃ…心ここにあらずニヤ…ニヤニヤ!？」

まゆりはオムライスの一番大切なところ、ケチャップ文字を書くところだった。

その文字は、世界がヤバい等、リクエストに答えることもできた。しかし…

「まゆしい！まゆしい！」

「は、はい!!あ、フェリスちゃん、どうしたの?」

「どづしたもじづしたもないニヤ、それどづするつもりニヤー!」

「え?」

「オカリン（はあと）って書いてどうするにゃ！さすがにそれは無いニャー！」

しかもそれ一回勝負ニャー！」

「う、ごめん！」

「とりあえずまた作ってもらうニャー！オムライス一つ急ぎでお願いしますニャー！」

「はあ…」そして、また呆けるまゆりだった。

「…だめだこりゃニャ…」

フエイリスはまゆりを早く上がらせることにした。

二人で更衣室に向かう。

「本当なら一日働いてほしかったんだけど、このままじゃ大変なことになるにゃ…。」

「ごめんなさい、フエイリスちゃん…。」

「いつもはすぐ働いてくれるから、みんなも理解してくれたにゃ。とりあえず、さっきのオカリンオムライス食べてにゃ。」

「わー！いいの！？ありがとう！」

「捨てちゃうのももったいないニャ。みんなには内緒ニャー！」

「うんうん！美味しいねえ」まゆりは、がつがつと食べている。

そして神妙な顔から、フェイリスは一転してニヤニヤした顔になる。

「にゃふふふ…で、昨日はどうだったのニヤ？」

「もぐもぐ…昨日って？」

「まーたーしらばっくれちゃって…凶真と一晩過ごしたニヤ？」

「まゆしいの今日の様子からすると…よほどいい夜だったニヤ！」「さあ！さつさと白状するニヤ！」

「ゴホゴホ！そんな！何も無いよー。ただ、一緒に寝ただけ…」

「一緒に寝たニヤ！凶真とニヤ！それは、すごい進展ニヤ…まゆしい…恐ろしい子ニヤ…ちょっとうらまゆしいニヤ…」

「え？」

「ニヤニヤ！？…なんでも無いニヤ！それで、どうだったのニヤ？」

「どづつて？」

「どづつて、一緒に寝て何もなんてありえないニヤ！…って…本当に何も無かったニヤ…？」

「だから、一緒に寝ただけだよーフェリスちゃん！」

「一緒に寝てるのに…お互い何もしないと…どんだけニヤ…」

「もう、フェリスちゃん！」

「ごめんニャ！でも、どうして今日はそんな呆けていたのニャ？  
一緒に寝たことは、あまり関係ないみたいニャし」

「ええ！？ごめん…ちょっとそれは…」

「フェイリスとまゆしいの間に、隠し事は無しニャよ！」

「うー、だれにも話しちゃだめだよ？フェリスちゃん…」

「おkニャ！」

「実はね…」

「オカリンがまゆしいの事を好きらしいの…」

「……」フェイリスは無言になっている。

「…これは…驚くところかニャ？」

「え！？フェリスちゃんは知ってたの？」

「直接聞いたわけじゃないニャけど、今までの凶真とまゆりを見れば分かるニャ…」

「すごい！フェリスちゃん！」



「…分からないのはまゆしいと凶真ぐらいニヤ…」

「そうなんだ…」

「でも好きでも、らしいってどういことニヤ？」

「うーんとね… オカリンが好きながいて、昨日その人がラボに  
来たの」

「ニヤニヤ！…いつのまに！…」

「その人もオカリンが好きだったの。で、そうしたら、その人が  
オカリンにまゆしいの事も好きなんでしょ？って聞いて オカリン  
がね…」

「好きっていったのかにゃ！？」

「好きとは言つて無いけど…そんな感じだったかな。実は盗み聴き  
しちゃって、あはは…」 まゆりは申し訳なさそうにする。

「むむむむ…これはどういことニヤ…その人とちょっと話がした  
いニヤ…」

「えええええ！ちょっとやめてよ！フェリスちゃん！」

「だめニヤ！これはこのお店も関わる重要な事ニヤ！それに、ま  
ゆしいには悪いようにはしないから安心してにゃ！」

「えええええ…フェリスちゃん…」

「ここは…今すぐ凶真に電話するニヤ！」

岡部の携帯から着信音がなる。

「ん？だれだ？フェイリスか…」

「どうした？フェイリス」

「あ、凶真？今、話しても大丈夫にゃ？」

「ああかまわん。どうした？」

「今、凶真の好きな人ってそこにいるのかニヤ？」

「な、なんだってー！！！！おおおい！フェイリス、だから聞いたそんなこと！まゆりか！？」

「どうしたの？岡部？だれから？」

「ああああいや、紅莉栖には関係ない！」

「そう？って私が引き下がると思う？なんか、女の声がするんですけど！誰なの！？」

フェイリスの耳に岡部のそばにいた紅莉栖の声が入る。

「そこに居るのニヤ！？代わってほしいニヤ！」

「な、なんだって！！いやそれは無理だろ！」

「なにが無理なのよ！岡部！ちよつと携帯貸しなさい！」

「ああ！紅莉栖！」 岡部の携帯を奪い取った紅莉栖。

「まったく…」 紅莉栖は岡部に睨みをきかす。

「…もしもし？」

「あ、あなたが、凶真、あ、岡部さんの好きな人じゃ？」

「ええ！？いきなりちよつと！どこからその話を…」

「やっぱりそうニヤ！今はそのことは置いて、まゆしいについてちよつと相談が有るニヤ」

「え！まゆり？まゆりに何かあったの？」

「ちよつと長くなるけど、大丈夫かニヤ？」

「あ、じゃ、私の携帯の番号を言っわ。そっちにかけて」

「了解ニヤ！」

「はい。岡部」 紅莉栖は、岡部の携帯を返す。

「…」 黙って携帯を受け取る岡部。

「…フェイリスと何もないからな…」

「当たり前じゃない。あっちこっちに手を出せるような男じゃないってことぐらい分かります」

「…」岡部は少し凹んでいる。

「じゃ、ちょっと外で電話してくるわ。岡部はラボで留守番よ」

「おおい、紅莉栖…」ラボに一人残った岡部。

「なんか…さみしい…」ぼつりと一言こぼす岡部だった。

ラボ近くの公園のベンチに座り、紅莉栖はことのあらましをフェイリスに説明した。

「なるほどニヤ…その話をまゆしいは聞いちゃったにや」

「実は聞いていたのね。岡部がまゆりの事を好きだったこと」

「え！やっぱりそうかニヤ？」

「状況的にね、でも決定的な事をなかなか言えないのよね…。あのへタレ…」

「確かにへタレにや…」

「フェイリスさん？でいいのかしら？」

「そうニヤ。私はクーニヤンでいいかニヤ？」

「クーニヤンって…まあいいか…何かいいアイデアないかしら？  
岡部をまゆりに告白させる方法…」

「うーん…ちなみに今はどこに居るニヤ？」

「えっと、ラボの近くの公園よ」

「え、そんな近くに居たのかにゃ！」

「じゃあ…、まだ仕事あるけど…うーん…これは仕事どころじゃな  
いニヤ！ここは仕事は投げ捨てる時ニヤ！」

「いや…それはどうかと…」 紅莉栖は心配する。

「とりあえず、そこで待ってて！迎えに行くにゃ！」

「おk。分かったわ」

「ふー。まゆりの友達か。やっぱりいい友達を持つてるわねまゆ  
り。羨ましいな。」

紅莉栖は、自分が今まで生きてきて、いかに友達がいなかったかを  
思い起こした。

「ちょっと今までの生き方が極端だったかも…」

少しして、一台の車が公園脇に止まる。

「何かしら、あの車。またリムジンってどこのお金持ちかしら…」

車から、初老の男性が降りてくる。公園に入り、ベンチに座る紅莉栖の前に立って  
深々と頭を下げた。

「失礼します。クーにゃん様でいらっしやいますか？」

「は、はい！？ええっと…どちらさまでしょうか？」

「お嬢様がお待ちでございます」

「お、お嬢様！？」

車から、声が聞こえてくる。

「クーニヤーン！クーニヤンかニヤ！？」

「え、ええええええ！？」

紅莉栖は、初老の男性と、リムジンに乗っているフェイリスらしき女の子を

何回も見ながら、驚嘆の声をあげた。

タイムズタワーの最上階。紅莉栖は、そこに案内される。

「ここが…フェイリスさんの自宅…」

「そうニヤ!」

「もの凄い見晴らしね…」紅莉栖は、眼下に広がる景色に息を飲んだ。

「あのクーニャン…早速なんだけど…」

「あ、そうね!」

二人は、高級感あふれるソファに座り、岡部がまゆりにしっかりと自分の思いを伝えるように作戦を練った。

「んーんん…、やっぱり…私がやらなきゃだめ?」

「他に適任者がいないにゃ」

「橋田…」

「ムリムリムリ!だからそれは何回も言ってるニヤ!」

「は…しょうがないわね…これもまゆりのため!がんばるわ!」

「その意気ニヤ!…それにしても…どうして凶真に告白されたのに、独占しようとは思わなかったのニヤ?」

「うーん…まゆりには幸せになってほしいというか…」

「私は、あくまでも降って湧いたような存在じゃない？」

「岡部とまゆりは何年もの付き合いなのに、そこに私が、割り込んだみたいで……」

「でもね、まゆりは一言も、私に恨みつらみみたいな事を言わないの。むしろ、応援してくれる……」

「……まゆしいはそういう子ニヤ……」

「もちろん、正直に言えば、私も岡部はその……好きだから……でも、まゆりならいいなって……ね」

「……フェイリスも……」

「えっ？」

「あ、なんでもないニヤ！早速、準備にとりかかるニヤ！えっとまず、衣装あわせにゃ……」

「がんばりましょー！」

「で、まゆしいに連絡ニヤ！」

「トウツトウルー フェリスちゃんどうしたの？あ、さっきはごめんねー」

「それはもういいニヤまゆしい。今何処にいるにゃ？」

「裁縫道具を買いに来ていますっ」まゆりは鼻息荒く答えた。



「さすがまゆしいニヤ…今時間あるかニヤ？」

「うん、大丈夫だよ。これから予定ないし」

「そうかニヤ！じゃ、大至急うちに来てほしいニヤ！」

「ええ！？何かあったの？」

「いいから、早く来てにゃ！待ってるニヤ！」

すぐに電話は切れた。

「んん？どうしたのかな。フェリスちゃん…」

まゆりは手芸雑貨屋を出て、フェリスのマンションに向かった。

「はーすい…」まゆりは驚いている。

「まさかここまでとは思わなかったニヤ…」フェリスも驚いている。

「ちょっと！あまりジロジロ見ないで！恥ずかしいじゃない！」

「何をいつてるニヤ、クーニヤン…ものすごく似合ってる…ニヤ…」  
フェイリスは息を飲んだ。

「もう、お願いだから見ないで…」

「何を言ってるにや、その格好でまゆしいと外に出かけるニヤ？  
ここで恥ずかしがってる場合じゃないにやー」

「それはそうだけど…ほら、早くまゆりに確認を…」

「あ、そうだニヤ。じゃ、まゆしいいかにや？」

「うん。えっと…メイクインのPVに使う映像を私と紅莉栖ちゃん  
で撮るのね」

「そうにや。で、これをお願いにや」

紅莉栖とまゆりは、フェイリスからワイヤレスのマイクと、イヤホンを受け取る。

「指示はここから出すニヤ。二人は、適当にぶらぶらしてくれてれば  
いいニヤ。とりあえず、クロスフィールドがいいかニヤ」

「了解」「おっけー、フェリスちゃん」

「じゃ、出発ニヤ！後から、合流するにや！」

フェイリスはマンションから二人を見送った。

「さーて…作戦開始にや！」

）

「ん？またフェイリスか…」岡部は電話に出る。

「なんだ？また用か？」

「凶真！大変にや！まゆしいが！」

「なんだ！？まゆりがどうした！？？」

「なんかすごいイケメンと、歩いていたニヤ！」

「はは…、何を言ってるフェイリス。まゆりがそんなこと…」

「凶真！フェイリスがウソを言ってるだけでも言うのかにや！？」

「…そうは言って無い…本当なのか？」

「本当ニヤ！凶真…どうするにや？」

「どうするもなにも…」

「実は今、まゆしいを尾行中ニヤ！凶真も来るニヤ！」

「いや、それはまずいだろ…」

「何言ってるにや！まゆしいが大事じゃないのかニヤ！」

「それはそうだが…」

「煮え切らない言葉だニヤ…凶真の薄情者ニヤ！もついいにや！」

フェイリスは電話を切った。

「さて…これで何も無かったら…まゆしいかわいそうだなや…」

「今は、どこだ？」岡部からメールが来た。

「ふふふふ！釣られたニヤ凶真！それでこそ凶真ニヤ！」

じゃ

「UDXの2階のカフェに居るニヤ。大至急来るニヤ！」

「送信つにゃ！にゃふふふふ…楽しくなってきたニヤ！」

まゆりと紅莉栖は、クロスフィールドの2階の通路に一緒に居た。

「遅いねーフェリスちゃん」「そうね…」(何やっているのかしら…)

「あーあー。まゆしい、クーニヤン聞こえるかにゃ？」

「聞こえまーす」「聞こえるわ」

「自然な感じを撮りたいから、そのまま話していて欲しいニヤー  
できたらもう少しくつついて欲しいニヤ。フェリスは見えないと  
思うけど」

ちちゃんと撮ってるから、気にしないでニヤー！」

「で、合図があったら、お互い見あって欲しいニヤ！コンコンってマイクを叩くにゃ！」

「おっけー」「了解よ」

「さて…、もうそろそろ来て欲しいところ…あ！きたニヤ！」

「…フェイリス…どこだ？」

「凶真！あそこニヤ！」

「確かに、通路に並んで話をしているような人影が見えるな…」

「こちらから見ると、まゆり、奥に例のイケメンか…。細身で長髪…、美形そうな感じだな…」

「近くで見たときは、とんでもないイケメンだと思ったニヤ…」

「むづ…何を話している…まゆりも楽しそうだな…って服もかわいいな…」

「分かるかニヤ？あれは実は、フェイリスが貸したのニヤ…」

「なんだと！？」

「あ、誤解しないで欲しいニヤ！あくまでも貸しただけでデートに使うとは聞いてなかったにゃ」

「…まさかまゆりが…だと…」

(うまく乗ってきてくれたニヤ…)

岡部の様子を伺うフェイリス。岡部に明らかに落ち着きが無い。

「ラボでいえば男は、ダルと俺。いかんルカ子もだ。その他の男と、あんなに親しく話すまゆりは初めてだ…」

(凶真…だいぶ、心が揺れてるニヤ…そろそろいいかニヤ…)

コンコン！フェイリスは二人のイヤホンに入るマイクを2回叩いた。

話し合っていた、二人はお互い見合った。

夜に近づいているだけあって、ムードもある状況だった。

「ああ！凶真！なんかいいムードになってきてるにゃ！」

「…！！ぐぐぐぐ…！！！」

(行け！行くんだニヤ凶真！)

フェイリスの念が通ったのか、岡部はまゆりの元に走っていった。

「うおおおおお…！！まってーい…！！！」

まゆりの前に岡部は走り込んだ。

「まゆりは俺のモノだ！誰にも渡さん！」

岡部はまゆりを後ろに置いて、イケメンに立ちほだかった。

!!

岡部が突然現れた事に驚く、イケメンとまゆり。

イケメンはとつさに顔を隠し、一目散に逃げ出した。

「え、あ？おおい！？どこに行く！！？？？」

ちよつとした言い争いも覚悟した岡部は、突然逃げ出したイケメンに驚いている。

「何だっただんだ一体…。ふう…」

「…オカリン？」

「おお！？」後ろからの声に驚く岡部。イケメンの方に集中していた。

岡部は振り返って見た。

「う…」

まゆりは、軽くではあるがメイクをしていた。服もフェイリスが貸しただけあってとても可愛らしい。

「まゆり…」岡部はそんなまゆりに見とれている。

「何？オカリンこそどうしたの？」

「どうしたも何も…あのイケメンはどこどいつだ？」

「あ、あれはね…って…ひよっとしてオカリン…」

「な、なんだ？まゆり…」

「ひよっとして、私がデートしてたと思った？」

「…！ググ…、そ、そんなことは無い…」

「えー。でも、さっきまゆりは俺のものだ！ってオカリン言ったよ？」

「そ、そんな事を言ったか…な…」

「えへへへへー、まゆしい嬉しいです！」まゆりは、満面の笑みを浮かべた。

「そ、そうか…」（いかん、気持ちが高ぶる…）

「あのねオカリン？」

「なんだ？まゆり」

「オカリンって…私のこと好き？」

「まゆしい…！！なんてストレートに聞くのじゃ！」

まゆりのマイクから伝わる二人の会話に、フェイリスはのけぞるよ



うに驚いている。

「な！なんだ！？突然！まゆり！」

「うん…ちょっとね…私はね、オカリンのこと大好きだよ」

「…まゆり…」

「…実はね、紅莉栖ちゃんとオカリンの話を聞いちゃったんだ…」

「！…！…！…そうなのか…」

「ごめんね。盗み聞きしちゃって」

「…全部か？」

「う、うん…ごめん…」

「そうか…」

お互い何も言わない時間が流れる。

「ふう…」岡部は一呼吸ため息を付いた。

「オカリン怒ってる？」

「怒ってなんかいないさ」

「よかった…」まゆりは安堵の表情を浮かべる。

「あいな、まゆり…」

「なに？オカリン」

「俺は…紅莉栖の事を好きだって言ったけど…」

「うん」

「まゆりの事も好きだ」

「！！！！凶真！！！！」フェイリスは驚きのあまり声を上げそうになる

それよりも驚いているのは、まゆりだった。

「あわわわわわわわ！！！！えっ、ええええ！？私の事を好きって言ったの？オカリン！」

「おいおい慌てるなってまゆり」突然あたふたしているまゆりを見て、岡部は笑う。

「本当なら、もっと早く言つべきだった。すまん、まゆり」

「ええええええ！いいよそんなの！あわわわ！！！！！」

「おおい、落ち着けてまゆり。ほら、深呼吸」

「すーはーすーはー」本当に深呼吸をするまゆり。

「どうだ？落ち着いたか？」

「う、うん…。ふー」

「あははははは」岡部は笑った。

「も、もう！笑わないでよ、オカリン。びっくりしたんだから！」

「すまんすまん」

二人の間に静寂が流れる。

「あ、あのね？オカリン」

「ん、どうした？」

「もうちょっと顔をよく見せてくれないかな？」

「傍らに立ち、まゆりは岡部を見上げている」

「どうした？まゆり？少し屈んで、まゆりに近づいた」

まゆりは、岡部の両頬を手で優しく挟む。

「オカリン大好き」

まゆりは、岡部の顔に自分を近づけて、唇を重ねた

！！！

ほんの少しの時間だった。

「…いきなりごめんねオカリン」

「い、いや…一向に構わん…」

「ううん、そうだね…。でも紅莉栖ちゃんに悪い気がするかな…」

「いや、これは紅莉栖が望んだことでもある…（おそらく）」

「そ、そっか。そうだよね…。ね、オカリン？」

「な、なんだ？」

「もう一回…いいかな？」

「な、なんだって…！！！！」

「だめ？」まゆりは、上目使いで岡部を見る。

「い、いやだめな訳ないが…」（心臓が口から飛び出そうだ！）

「じゃ、もう一回…」

今度は、軽く2回唇に触れた。

「はぁ…嬉しいです…」

「そんなに嬉しいのか？」

「うん！」はち切れんばかりの笑みを、岡部に見せる。

お互いの顔は近いまま、話しあう二人。

いつしか、何の合図の無しに岡部からもキスをしていた。

そして、二人は人目もはばからず抱きしめあっていた。

「はぁぁぁ…自分で計画したとは言えにゃ…」 フェイリスは、二人の会話、状況をすべて見ていた。

「…ものすごく凹むにゃ…はっひっひ…」

そこに、紅莉栖が現れた。

「どっつ…うまくいった？」

「うまくいったもなにも！大成功ニャ！」 フェイリスは半ば怒って

いた。

「ちょっと、どうしたの？フェイリスさん……」

「どうしてもこうしたも無いにゃ！クーにゃんもまゆしいも！羨ますぎて、フェイリスどうかしちゃうにゃ！」

「え！ひよっとして……」

「は！今のは……クーニャン……まゆしいには内緒ニヤ……」

「うん。分かったわ……。ごめんなさい」

「謝ってほしくないニヤ……なんか惨めになるにゃ……」

フェイリスは、肩をわなわなと震わせている。次に思いっきり息を吸い込んだ

そして

「もおおおお……！凶真のばかああああああ……！！……！！……！！」  
UDXにフェイリスの絶叫が響き渡る。

「……！！ちょっと二人に聞こえるって！フェイリスさん！」

「うつるさいニヤ！リア充は今すぐ爆発しろニヤ……！！うわあああああん！」  
フェイリスは泣き始めた。

「ああああ……まいったわね……。とりあえず、もどりましょ。フェイ

リスさん…ほら」

紅莉栖は泣くフェイリスをおんぶして、フェイリスの自宅に向かうのだった。

## フェイリス大作戦 2 - 1 (前書き)

数字にはあまり意味はありません。いつかちゃんとしたサブタイトルにしていききたいと思います。



## フェイリス大作戦 2 - 1

「よっ、はっ！」

ふらつきながら、フェイリスをおんぶした紅莉栖はフェイリスの自宅に戻った。

「ぐすっ、くーにゃんごめんにゃ…」

「立てる？」

「うん…。ありがとうニャ…。」

「いいのよ、気にしないで。」（岡部の事が好きなら、あの場面に見るのはさすがにづらいわ…）

「本当に、フェイリスさんって友達思いなのね…」

「まゆしいは特別ニャ…。あの子は本当に親友って言える子ニャ」  
ソファに座っているフェイリス。

「そうね…。本当にいい子だわ」

ピンポン

インターホンが鳴る。執事が出てみると、まゆりだった。衣装を返しに来たらしい。

「え！もうまゆりが来たの？」

「もうニヤ！？」

「ふう…よっし！」フェイリスは頬を両手で2回叩いた。

「もう、大丈夫ニヤ！！」

玄関の前に立ち、まゆりを迎える。

「フェリスちゃん！紅莉栖ちゃん！」まゆりは満面の笑みだった。

「よかったわね、まゆり」

「まゆしい、ものすごい笑顔ニヤ！」

「うん、本当に本当にありがとう」まゆりは涙目になる。

「にゃふふふ、フェイリスの作戦は大成功だったニヤ！」

「え、作戦って？」まゆりは首をかしげる。

「撮影はウソだったのよ、まゆり」

「ええええ！そうだったの？」

「そうニヤ。初めから、凶真とまゆしいをくつつける作戦だったニヤ」

「はー、え！？じゃ…全部見てた…の？」

「そうニヤ　なかなかのラブシーンだったニヤ、本当にカメラ持っていけばよかったにゃ」

「もうう、フェリスちゃんったら…。でも、ありがとう!」まゆりはフェイリスに抱きつく。

「よかったニヤまゆしい」フェイリスはまゆりを優しく撫でた。

「あ、そうそうフェリスちゃん、かわいい服ありがとう」

「私もありがとう、フェイリスさん」

「お安いご用ニヤ!でも、まゆしい…」

「なに?フェリスちゃん」

「あんなにいいムードだったのに…もう帰ってきたのかにや?」

「えっ?ダメだった?」

「ダメって言う…にや…あのままどっかに行ったりとか…色々できたにゃー」

「ああああ!気がつかなかったよ…しよぼーん)。(。(」

「…まゆしいらしいにゃ…」

「それに、岡部もどうかと思うわ…」

「ま、次があるにゃ!もうお互いの気持ちは分かってるニヤ!」

「そうね。まゆりがんばって」

「くーにゃんもがんばらなきゃダメニャー」

「グググ…確かに…」

「あはははははは！」 3人の笑い声がフロアに響き渡る。

そして、二人は着替えに行く。

)

「ん？着信ニャ。凶真から？」

「どうしたにゃ、凶真？」

「まゆりはいるか？」

「今、着替えてるにゃ」

「…俺をはめただろフェイリス。」

「！…！…な、何のことかにゃ！？」

「まゆりが撮影って言ってたぞ？俺は撮影とは知らなかった。

おそらく、まゆりに撮影と言ったのも、ウソだな。まったく…。

踊らされた俺が馬鹿みたいではないか」

「ごめんニヤ凶真…でもニヤー！」

「分かってる。俺は踊らされて、ちょっと悔しかったただけだ。」

「まゆりの為を思つて、俺を炊きつけてくれたんだろ？ …ありがとうフェイリス」

「…！凶真からお礼を言われるとは思わなかったニヤ…」

「ああでもしなきゃ、確かに俺はグダグダとまゆりと付き合ってたかもしれない。」

「だからこそ、お前に感謝しているのだ」

「…凶真…」

「この恩は決して忘れないぞ」

「にゃふふふ、じゃ、今度…、1つだけお願いごと聞いてほしいニヤ」

「なんだ？」

「今は言えないにゃー」

「内容にもよるが…、まあいいだろう」

「やったニヤー！」

「ふふ…、じゃあまたな。フェイリス」

「うん、凶真またにゃ」

ついさっきまでの心の辛さが、嘘のように晴れているのがフェイリスは感じた。

「にゃふふふふふ…。今の会話、録音しちゃったにゃ！何を凶真にしてもらおうかニャー」

二人が着替えて戻ってくる。

「あら、ご機嫌じゃない。フェイリスさん」

「本当だね！。何かいいことあったの？」

「ううん！なんでもないニャ！あ、でも凶真にはバレちゃったにゃ」

「え！ちょっと私が男役つてことも…？」

「あ、それは聞いてないにゃ」

「そう…よかった…」

(私が男装していたなんて、岡部にバレたらなんて言われるやら…)

「これから、ふたりともどつするにゃ？」

「そうね、今から帰るつもりよ」  
「まゆしいも帰りまーす」

「せっかく、くーにゃんとも知り合っただし二人共泊まっっていくニヤ」？

「ええええ！？ここに？」

「ダメならいいけどニヤ…」

さすがに、この申し出を簡単には断れない二人。  
フェイリスの作戦がなければ、岡部とまゆりの仲は深まらなかった。

二人とも、フェイリスの自宅で泊まっっていくことになった。

「今日は誰もいないから、私にご飯作ってあげるのニヤ！」

「フェイリスさん、料理もできるの？」

「もちろんにゃ！」

「すごいわね…」

「じゃちょっと下ごしらえするにゃ。ちょっと手伝ってほしいニヤ。」

「もちろん。」

「もっちらんだよー。」

「あわわわ…頼むんじゃ無かったかにゃ…」

明らかに手付きのおぼつかない二人。フェイリスは冷や汗をかいている。

「あ、クーにゃんはどこに住んでいるのにゃ？ フェイリス、クーにゃんの事何も知らないにゃ。」

「自己紹介も全くしてないわね。ごめんなさい。 えっと、私は今はアメリカ在住なの。ここにはホテル住まい。

もう少ししたら、帰る予定よ。」

「えー！ そうなの紅莉栖ちゃん！」 まゆりはむいていたじゃがいもを落とす。

「言っでなかったわね、バタバタしてて…えっと数日後には日本を立つ予定なの。ごめんなさい」

「別に謝ることは無いにゃ。でも、どうしてにゃ？」

「うーん、簡単に言うと…職を失う感じかな」

「それは…大変ニヤ。でも、若いのに凄いにゃ」

「うん、そつだねえ」

「うーん…本当なら、もっとここに居たいんだけど…」

「オカリンを探していたんだっけ？ 紅莉栖ちゃん」

「うん。そつなの」



「どれぐらいにゃ？」

「えっと、途中でアメリカに帰った期間もあるから少なくとも一ヶ月かな……」

「一ヶ月ニヤ！？ものすごい執念ニヤ……」

「すごいねー」

「でも、せつかく凶真と会えたのに、もうアメリカって寂しいニヤ……」

「仕方ないわ。それに、もっと前向きにこれからを考えようと思つて。日本に戻るうかとも考えてるの」

「本当に！？まゆりは驚く。

「ええ。ここは本当にいいところね。まゆり、フェイリスさんもいるし」

「にゃふふふ……凶真もいるにゃ。ここが一番大事なところにゃ」

「そ、それは……」紅莉栖は顔を赤くする。

「ふーむニヤ……。これはまた一肌脱いで見せようかにゃ？」

「え、何するのフェリスちゃん？」

「またさっそく、凶真に電話するにゃー！」

）

「今日は、フェイリスからの電話が多いなw」

「そうニヤw」

「で、なんのようだ？」

「実はにゃ…ラボメンをみんな集めて、くーにゃんのお披露目をやりたいにゃ」

「いいな…ラボメンの面通しにもなる。で、いつにする？」

「明日ニヤ」

「明日！？えらい急だな」

「善は急げって言うにゃ」

「よし、分かった。招集をかけてみよう。なによりも、フェイリスの頼みごととなればな」

「よろしくにゃー！」

「あ、まゆしいと、くーにゃんは今晚ここに泊まるにゃー！」

「…そうか…まゆりをよろしく頼む。何かあったら、電話をくれ」

「まゆしいがどうかしたのかにゃ？」

「いや、なんでもない……」

「じゃねー凶真！」

「フェイリスさん……。本当にありがとう……。紅莉栖はフェイリスの手を両手で取る」

「気にしない気にしないニヤ」

「じゃ、ちよっと時間がなかったから、ハッシュドビーフニヤ！  
もう少し煮込むニヤー」

グツグツ……

「さーて、明日はどうしようかニヤ……。にゃふふふふ……」

明らかに悪巧みをしてそうな笑い方をするフェイリス。

紅莉栖と、まゆりは嫌な予感しかなかった。

「大丈夫かしら……」

「フェリスちゃん……」

3人は食事を済ませて、リビングで話込んでいる。

「それにしても、クーニヤンは凶真とどこで知り合ったのかにゃ？  
凶真と会って、ほとんど数日しか経ってないにゃ」

「それは色々と事情があって…ちょっと難しい話になるわね…」

「ニヤニヤ？それはどういふことにゃ？」

「本当なら、岡部から話すべきなんだけど… うんやっぱり私から  
話すよりも岡部から聞いて。ごめんなさい」

「むー。クーにゃんがそこまで言うなら、そうするニヤン」  
(凶真と話がしっかりできる機会をゲットニヤ！うひひひ)

）

「ニヤ？萌にゃんから？」

「あれ？萌郁さんからメールだ」

「あ、ラボメンの人？」

「うん、そつだよー」

「えっと、激写？って…」まゆりは添付されていた画像データを見  
た。

「ああああ…！…！」

「ちょっとこれって…！…！」覗き込んでいた紅莉栖も驚く。

メールに添付されていたのは、まさに岡部とまゆりがキスをしているところだった。

「フェリスちゃん！萌郁さんってあそこにいたの!？」

「フェイリスは知らないニヤ！これを見るかぎり、下から撮ってるニヤー！」

「まゆり…ちょっとよく見せて…。わーいいな！。よく撮れてる…うらやましい…」

「紅莉栖ちゃん！それどころじゃないよー」

「どっしたの？」

「これ多分、一斉送信だよ…」

「!?!?!?!?!」紅莉栖は驚く。

「多分、そうにゃ…」

「と、言うことはまゆり…」

「多分、オカリンはもちろん、るか君や、ダル君も…ひよっとしたら、緋ちゃんや、店長さんまで…」

「萌にゃんの恐ろしきスキル、撮影＋一斉送信ニヤ…」

「まあ…遅かれ早かれみんな知ることだし…ね」

「まあ、そうニヤね。さらに明日が楽しくなってきたにゃ！にゃふふふふ！」

「もーフェリスちゃん、まゆしいは恥ずかしくてしょうがないのです…」

3人は一緒に入浴を済ませ、3人でも眠れるキングサイズのベツトルームに移る。

ここでも話が弾む。

「ちょっと、クーにゃんはテキスト通りすぎるにゃ！」

「え！？そう…なの？」

「なんか段階を踏んでっていうか、3回目のデートからーとか、そんなの時代遅れニヤ！」

「へー、そうなんだフェリスちゃん…」

「まゆしいは結構感情でドンドン行く所があるから、そのままでもいいかもにゃ」

「え、そうなの？まゆしいよくわからないや、えへへー」

「天然だわ…」

「まゆしい恐ろしい子ニヤ…」

「まあ、フェイリスの場合は相手がまったく気がついてくれないな  
かったニヤ…鈍いというかニヤ…」

「え、フェリスちゃんのそんな話初めて聞いたよ!」

「初めてしたにゃー」

「フェイリスさん…」紅莉栖はフェイリスをじっと見つめる。

「クーにゃんは頑張ってるにゃ!じゃないとフェイリスが…」

「えっ!!ダメよ!ダメだってば!!」

「ニヤフフフ、冗談ニヤ!」(今は、にゃw)

「もっ…」(うかうかしてられないわね…)

いつまでも話は弾み夜は更けていく。3人はいつしか眠りについた。

## まゆりの闇と岡部の罪

「んー、なんだ…だれだこんな時間に…」

岡部は時計をみる、すでに3時を回っていた。

着信はまゆりからだった。

「まさか！」

「どうした！まゆり！」

「あ、岡部！？ごめん、こんな遅くに！」

「紅莉栖！どうした！？岡部にはだいたいの予測がついていた。」

「まゆりの様子がおかしいの！今、フェイリスさんの知り合いのお医者さんが来てるわ」

「分かったすぐに行く！フェイリスの所だな！」

「ええ、お願い！でも、自宅じゃないの？」

「いや、ひょっとしたらと思ってラボにいたんだ。」

「よかった…早くお願い！」



すぐに携帯を切った岡部は、着る服もそのままにラボを飛び出した。

「はぁ…はぁ…。」

フェイリスが玄関のドアを開ける。

「う…ぐす…凶真…」

「すまん…まゆりは？」

「さっき、お医者さん注射してもらったにゃ…。」

「…そうか…」

「それでは、私はこれで」

フェイリスの脇を、明らかに叩き起こされた様子の医者らしき人間が通る。

「ありがとうございます」フェイリスと岡部は深々と礼をする。

「まゆりは、どこに？」

「3人で寝たところにゃ…。」

岡部は、ベットルームに案内される。

一人、まゆりが寝息を立てている。

「私、岡部の携帯番号知らなくて、勝手にまゆりのを借りたの」

「そうだったな…」

「まゆりは？」

「さつきまで、ちょっと錯乱状態だったけど鎮静剤を打ってもらって今は落ち着いてるわ…」

「岡部…まゆりに何があったの？」

「フェイリスも聞きたいニヤ…」

岡部は深く息を吸い、重い声を出す。

「分かった。話そう」

「…俺はこの世界とは違う所から来た」

「な、何を言ってるニヤ凶真！そんな事言ってる場合…」

「フェイリスさん、これは本当なの。岡部を信じて。」

「くーにゃん…じゃ凶真、フェイリスの目を見てニヤ。」

「ああ、知っている。お前の能力だな。嘘を見抜けるんだろう。確かチエシヤ猫の微笑。」

「ニヤニヤ！？どうしてそれを！？」

「父親を亡くしてから、秋葉原の開発に携わるようになって  
萌え文化を秋葉原に取り入れるようにしたのもフェイリスだな。」  
「小さいころから、取引先の人間を観察するようになって  
相手の嘘を見抜けるようになった。」

「合ってるか？フェイリス…」

「凶真…」

「そして俺は、フェイリスの父親の存在を消した。」

「…！な、何を言ってるニヤ凶真…」

「フェイリス、お前の父親は子供のころ飛行機事故で亡くなった。  
しかし、それを過去に送れるメールによって、死なない世界に変え  
たんだ。」

「フェイリスは息を飲み、岡部の話を聞く。」

「その世界は、今の秋葉原ではなく昔の電気街としての秋葉原だっ  
た。」

「しかし…その世界はまゆりが死んでしまう世界だったんだ。」

「え…まゆしいが死ぬってどういう事にや…」

「世界が、まゆりを殺すんだ。俺も、何回も何回も足掻いた。しか  
しだめだった…」

「俺は、その世界を元に戻すために、フェイリスが送った父親が死  
なないようにするメールを…」

「もう、もういいニヤ…凶真…」

「フェイリス、言わせてくれ。これは俺の罪なんだ。」

「もう、いいて言ってるにゃ！」フェイリスは涙目になり、岡部に訴える。

「う、ごめんニヤ…。」

「凶真に言われて、なんとなくだけどぼんやりしていたパパとの思い出は蘇ったニヤ。」

「覚えていたのか!？」

「少しだけだけど…あと凶真って私を助けてくれたニヤ？」

「…そうだ…情けないぐらいに打ちのめされたな…」

「ふふ…フェイリスの記憶だと、そのあとここで、フェイリスと凶真は…」

かなりきわどい状況になってなかったかニヤ？」

「!?!?そこまで覚えているのか？」

「えっ！ちょっとどっぴいっ」と岡部！

「いや、その…」

「クーにゃん、クーにゃん、何も無かったニヤよwただ、凶真の胸で泣いただけニヤ…。」

「フェイリス…すまなかった…」

「だから、凶真は謝らなくていいにゃ。まゆしいを助けるためだったニヤ…」

…

「ちょっと、ゴメンにゃ…。フェイリスはドアを開けて、部屋の外に飛び出した。」

「フェイリス！」

「…岡部…行ってあげて…ここは私がみてるから。」

「紅莉栖…」

「いいから、ほら。」

「すまん」岡部は部屋を出てフェイリスを探す。

フェイリスはリビングのソファに顔をうずめていた。

「フェイリス…」

「こっちにこないで！凶真！こんなフェイリス見せたくないにゃ！」

岡部は何も言わずフェイリスに近づく。

「だから…こっちにこないでって…行ってるニヤ…」岡部が近寄る  
気配を感じ取っていた。

フェイリスは、間違いなく泣いていた。

「…フェイリス、悪かった…」

「だから…凶真は…謝らないで…凶真だって苦しいのはわかってる  
から…」

「…」

フェイリスは突然立ち上がり、岡部に抱きついた。そして、二人は  
ソファに倒れこむ。

泣きながら両手で、岡部の胸を叩く。

「凶真！凶真！！思い出しちゃったよ！！！」

いつしか、語尾からいつものものが無くなっている。

「ここで、パパに甘えていたことも！雷ネットの全国大会に出てい  
たことも！全部！全部！」

「楽しかった思い出だけ…！こんな辛いよ…凶真…」

岡部は、何も言わず固くフェイリスを抱きしめた。

「う、うわああ…」フェイリスは岡部に抱かれ、思い切り泣き出した。

しばらくして、フェイリスが落ち着きを取り戻す。

「…凶真…ごめんね。」

「ああ、大丈夫だ。」

「…確か、こんな感じだったね。あの夜。」

「そうだな、ソファじゃ無かったが…。」

「ふふっ…あの時ね…」

「なんだ？」

「私、凶真に抱かれても良かったな…」

「…！！岡部は体を強張らせる。」

「凶真は、もう少しガオー！っていつてもいいと思うよ？」

「お、お前！こんな状況で…」

「今だって、…いいよ…」フェイリスは岡部の胸に顔を埋める。

「おおい…フェイリス…」（あああ、いかん気持ち…高ぶる！）

岡部の心臓は、ここに来る時の全力疾走よりも拍動していた。

「…凶真、ものすごく興奮してる…」

「と、当然だろう…」

「私にも、少しは興味があったんだね…」

「…」

「ねえ、凶真、お願いごと一つ聞いてくれる？」

「…な、なんだ？」（この状況でそれを言うかフェイリス…）

「だから緊張しすぎだよw凶真w」フェイリスは失笑する、いや今は完全に留美穂になっている。

「うんとね…キスして欲しいかな…」

「な、なに!?!」

「ダメ？」

「いや、そそそそれはマズイ!」



「もう…空気よめないなー凶真。いいもーんだ。」

フェイリスは、横たわる岡部を登り無理やり唇を重ねた。

ただの、触れるだけのキスじゃなく、お互いの唇が滑る感覚…。

岡部にはフェイリスの唇の柔らかさが、的確に感じられた。

「ふあ…はー、勝手にキスしちゃった…ごめんね、凶真」

「…」岡部はまだキスの余韻に浸っている。

「私が無理やりしたから、気にやまないでね！」

「…うん…」岡部は空返事をする。

「まあ、こんなキスもあるニヤ！凶真も勉強するにや！」

「…」（勉強つて…）

いつしか、フェイリスからいつもの語尾が戻っていた。

落ち着いた（岡部は興奮気味）二人は、まゆりの元に戻る。

「すまん…紅莉栖」

「?いいのよ岡部、フェイリスさんは大丈夫？」

「くーじゃん、ごめんじゃ。」

「???気にしないで。で、まゆりに何があったの?岡部、話せる?」

「ふー、ああ…話さなくてはならない。」

岡部は、口を開く。

「まゆりを助けるために俺は、何回も試したんだ。色々な選択を。」

「そのたびに、まゆりは…死んだ…。」

「俺はある時、まゆりの死を。まただめだったとしか思わなくなっていたんだ…」

紅莉栖とフェイリスは顔を強張らせる。

「最低だよな、俺。自分でもそれに気がついた時。心が壊れていると思った。」

「しかしその中に、sernによってまゆりが人体実験の被験者にされたものもあったんだ。」

「!!!なんですって!!!」紅莉栖は驚く。

「sernってあの?」

「そつだ。おそらくこの世界でも人体実験をしているはずだ。タイムマシン研究の。」

「俺は、その実験結果になった新聞の記事のまゆりの画像を見たんだ。」

「ぐぐぐぐ…」岡部は顔を両手で押さえる。

「ま、まゆりが!!!ゼリー状になって、壁に埋まっているの!!!この目で…見たんだ…」

「…!!!」紅莉栖とフェイリスは絶句している。

「おそらく、その記憶が今日、出てきてしまったんだろう…」

「拉致されて、被験者とされた時の記憶が…俺の…せいだ…。俺の…。」

「岡部…」

「凶真…」

岡部は、顔を両手につずめ泣いている。

紅莉栖は、岡部の傍らに立ち言った。

「岡部、あなたのしたことは間違ってるわ。現に、まゆりは助かってここにいるじゃない。」

「そうにや！凶真！」

「岡部の背負っている物を私にも…背負わせて。」

「フェイリスもニヤ！」

「紅莉栖…フェイリス…」

「グ、ぐふっ、あり、ありがとう…ありがとう…二人共…」  
岡部は立ち尽くし、顔も覆わずにむせび泣いた。

「ほらほら、男だろ？泣きすぎだw」

「す、すまん紅莉栖。」

「ぶふっ。酷い顔だぞ岡部w」

「な、なに！？」岡部は、袖口で顔を拭いた。

「えー、落ち着いた所でー、みんな一緒に寝るニヤ！」

「ええ！？な、何を言ってるのフェイリスさん…」

「みんな一緒に寝ようニヤ！」

「…じゃ俺は帰る。」

「くらくら！凶真！メインディッシュが帰ってどうするニヤ！」

「勝手に主菜にするな、って人を食べ物扱いするな」

「せつかく来たんだしー、みんなで寝ようニヤ！」

「…どうやって？」「岡部は尋ねる。」

「まゆしいと凶真はくつつくとしてー、くーにゃんとジャンケンニヤ！」

「ジャンケン！？私と？」

「そうニヤ！凶真にくつつく権利争奪戦ニヤ！」

「俺の意思は全く反映されないんだな…。」

「いやいやいや、私はいいわ。紅莉栖は顔を横に振る。」

（岡部と一緒に寝るなんて、私どんな顔しちゃうか…）

「にゃふー。じゃゴチになりますにゃー！」

「ゴチって…。」

結局、紅莉栖、まゆり、岡部、フェイリスと横並びになる。

まゆりは寝ているが、岡部がいるのを無意識に分かるのかそばにくっついている。

当然、フェイリスも岡部にくっついている。

紅莉栖は、ひとり普通に寝ていた。(何、この疎外感…失敗したかしら…)

岡部は、両脇にかすかな寝息と柔らかな感触、いい香りを感じている。

(こんなの寝れるわけがないだろう!!!)

「…おかべ…」

紅莉栖は、かすかな声で岡部を呼ぶ。

「…なんだ？」

「変態行為するなよ！」

「できっこないだろ！おい、朝までこのままなのか!？」

「さあね…。じゃ、おやすみ。」紅莉栖は背を向けて寝てしまった。

「おおい、紅莉栖…。」

結局、両脇の二人が起きるまで、ずっと起きていることになる岡部だった。

円卓会議（前書き）

オカルカがほんの少しだけ

## 円卓会議

ラボで行われる予定の、岡部曰く「第何回かの円卓会議」は夕方からになっていた。

それまで、紅莉栖は自分の用事を済ませに、フェイリスは仕事へ。岡部とまゆりは、一緒にラボに居る事になった。

「ふあああ…よく寝たな…」岡部はフェイリスの自宅に向かってから結局一睡出来なかったが

「そうだねーオカリン…ふああ…」

ラボに戻ってから、時間まで二人で一緒に昼寝をしていた。

「そうだ、昨日はごめんねオカリン…」

「ああ、いや、気にするなまゆり。それにだ、ここはありがとうと言っべきだぞ。」

その方が、まゆりも気に病まないだろ？」

「あ、そっか。ありがとうオカリン」

「よしよし。岡部はまゆりの頭を撫でた。」

「えへへー。」「まゆりは微笑む。

結局、まゆりが思い出したであろう、被験者の記憶は話さずにおいた。



確実に思い出しているとは言えないからだ。あえて、こちらから色々言っただけで、まゆりの中で確定させてしまうことは無い。また、発作的に起こるかもしれないが…。

これは、紅莉栖とも話し合った。

もう一つ。

「オカリン、紅莉栖ちゃんから聞いてる？」

「なんだ？」

「紅莉栖ちゃん、もう少ししたらアメリカに帰るって話。」

「ああ、今朝聞いた。もっと早く言って欲しかったがな。しょうがない。」

「でね？紅莉栖ちゃんに私も誘われてるの。」

「ああ…さっき電話があったな。」

これも紅莉栖からの提案だった。まゆりの記憶を催眠療法で部分的に解消しようとする。紅莉栖のツテで、相当著名な実践的な心理療法の権威と話がついたらしいのだ。

確かに、このままではまゆりが一人で寝ていた時何が起こるか分からない。

正直に言えば、寂しいし不安だが…。これからの事を考えると建設

的とも言える。

「大丈夫か？まゆりは。」

「大丈夫だよー。パスポートもあるし」

「いや、そういうことじゃなくてだ…。不安とかは無いのか？」

「紅莉栖ちゃんがいるし、大丈夫だよ（、（）」

「そうか…。」

まゆりには、ちゃんと治療目的と伝えてある。さすがに何も言わない訳にはいかない。

ただ、学校とまゆりの両親にすぐに話を付ける余裕がなさそうだな。なんとか誤魔化すしかないだろう…。

「ふう…。もうそろそろか？」

「そうだね！楽しみだなあ！うふうふう！」

「どうしたまゆり、えらく上機嫌だなw」

「そりゃそうだよ！みんなが集まることなんてめったにないもの！」

「そうだな。よかったなまゆり。」

「うん…！」

すでに、買出し部隊は買い物に出かけている。あとは、皆がここに集まるだけだ。

ピンポン！

「はいはい。」まゆりが来客を確認して、ドアを開ける。

「おじゃまします。」まず、ルカ子がやってきた。って学生服！？

「ルカ子…お前…制服…」

「あ、ごめんなさい！凶真さん！時間が無くてこのままで来ちゃいました！」

「ダメ…でしたか？」

「いい、いや一向にかまわんぞ。」

いつもなら、中性的、むしろ女の子っぽい服装を着ているが、今日に至っては男子学生服。

だが男だ。いやそれが普通だ。しかし、なんで…かわいいと思えるのだ！俺は、ノーマルだ！！！！

「まゆりちゃんおめでとー！」

「ルカ君ありがとう！」

「いいなー。羨ましいなあ。ものすごくムードのある写真だったよ。」

(!!そうだった!!!!萌郁のあれがあっただった!!!)

「…なにかありそうだぞ…ザワザワ…」岡部はきたる嵐の予感がしていた。

「凶真さん!まゆりちゃんを幸せにしてあげてください!」

「あああ!?!ああ、もちろんだルカ子よ。」

(そうか…もしかしたらあえて男子学生服を…)

当然ではあるが、ルカ子の心の中を俺は知っている。女の子になった時に、それは感情として俺に表された。ルカ子の言葉に俺の心は締め付けられる。

ピンポーン!

続々とラボメンが集まってきた。買出し部隊も、やってきて、全員集合…

「ん?ダルはどうした?だれか知らないか?」

「ニヤニヤ?凶真は知らなかったのかニヤ?」

「ん?なんだフェイリス。」

「今日は、ダルニヤンはデートニヤ。」

「な、なにいいいい！！！！誰と！！！！！！」

「うーん…名前は知らないけど、今日メインクーンに来たニヤ、一緒に。」

「ちよつとまで、聞いてないぞあいつ。」

）

ん？メールか。ダルだ！

人生で一度かも知れないチャンスが来たので、欠席するお！オカリ  
ンごめん！

「なん…だと…あいつ…」

「ほらほら凶真、人の恋路を邪魔する奴は車にはねられて死んでし  
まえニヤよ！」

「それは馬だろ…フェイリス…」

「現代版ニヤ。」

「…まあいい。では、ダル抜きで始める…」

「っっておおい！」

すでに、会は始まっていて各自、飲み物も配られていた。

「始まっているではないかー！！！！」岡部はいきり立つ。

「何よ岡部。お前の会じゃないだろうに。」

「それはそうだが…。」

「まあいい。とりあえず彼女が牧瀬紅莉栖。新しいラボメンだ。みな、よろしく頼む。」

「皆さん、よろしく。」

「わあ、すごく綺麗な髪…スタイルもいいし…。紅莉栖さんでいいですか？」

「いいわよ。ルカ…君？ルカちゃんじゃなくて？」

「男ですからw君でいいですよw」ルカ子は微笑む。

「…so suite…男にしておくにはもったいないわね…」

(それには俺も同意だ紅莉栖。口には出せんが)

)

「またメールか…って萌郁か！」

「お前まだメール依存なのか！いい加減にしろ！」

「だって…はなすの…苦手…」

「下でバイトしてるんだろっ！？接客はどうしてるんだ！」

「だからメールするなと…岡部はメールを見る。」

1件目は、紅莉栖の携帯の番号とアドレスを尋ねる内容。

「自分で聞けよ…岡部はうなだれる。」

2件目は、だって、お客こないんだもの…><

「なるほど、それはある。」

「まったく…できるだけ話せよ、萌郁…」

「うん…」

ドスッ！傍らに居た、紅莉栖から岡部の脇腹に肘が入る。

「グフツ」岡部は思わず声を出す。

「ちょっと、萌郁とか呼び捨てってなんなの？何か関係あるんじゃないでしょうね。」

紅莉栖は睨む。

「何？何を言っている紅莉栖、お前ひよっとして…ヤキモチ…」

「そ、そんなわけないだろ！紅莉栖は顔を赤くする。」

「ほらほら紅莉栖ちゃん、ヤキモチ焼いてないでー。みんなと話そ」

「…うん」 紅莉栖はさらに顔を赤くした。

「あははははは！…！！！」

ラボは、音程の高い笑い声で充満している。それもそうだ、俺以外、すべて女じゃない。ルカ子は男だ。見た感じ話も弾んでいる。紅莉栖も楽しそうで何よりだ。

「ちょっと！萌郁さんこれって！！！！」

「うふふ…」

「え、嘘！やめて！お願いします！」

「なんだ？えらく必死だな紅莉栖の奴。」

「また萌郁か…なんだ？」

「ああ！！岡部見ないで！」

メールに添付された画像を見る。



「!!!!んんん!!!」

これは例のイケメンってよく見たら紅莉栖じゃないか!!!!!!」

「きゃああああ!!!!!!」

「あちゃー、一番バレて欲しくない人にバレたニヤ、クーにゃんw」

「フッフ…フーハハハハハ!!!!!!いいぞ、萌郁、今俺は紅莉栖の圧倒的なる弱みを握ったぞ!」

「岡部…それで私を脅そうものなら、その頭に電極ぶっさして…海馬に電流を流しこんでやる!」

「…ごめんなさい。」岡部はすぐさま謝った。

「それにしても、みな打ち解けあって話が弾んでいるな…。いいことだ…ん?」

「なんか様子がおかしいぞ…」

ルカ子が突然飲み物を飲み干した。そして、テーブルにグラスをガツと置く。そして。

「凶真さんはひどいです!!!!!!」

「ルカ子!どうした!!!!??」

「なんですかその両手に花って!!!!!!そんなのおかしいです!!!」

「!!!」

「ちょっとまってーい！！誰だ話したのは！！」

「ニヤハハハ！ごめんじゃ！フェイリスニヤ！」

「おまえー！なんということを！！」

「…さて、何かおかしいぞ、何かが…まさか！！」

岡部は自分の前にある、まだ手をつけていない飲み物を一口飲む。

「おい！これアルコールが入ってるぞ！！！！誰だ！！」

「フェイリスにゃー、お店でも出してる人気のカクテルニヤよ！美味しいニヤ！」

「美味しいとか以前にお前！萌郁以外、全員未成年だぞ！」

「だってーやつぱり集まるなら楽しくしたいニヤwそんな時は、やつぱりおさけニヤ！」

「だからってな！」

「凶真さん！聞いてるんですか！！」ルカ子の怒声が飛ぶ。

「は、はいい！！」

「僕だって、僕だって！！！！」

「はい！いつてらっしやーいニヤ！！」フェイリスが岡部に向かってルカ子を思い切り突き飛ばす。

「おおおい！！岡部は、飛ばされてきたルカ子を抱きとめた。」

「きよ、凶真さん…！！」岡部に抱きとめられたルカ子は、岡部を抱きしめる。

ルカ子は、岡部の胸に顔を当て、岡部の体にしっかりと腕を回して抱きしめていた。

！！！！！！！！

この場面で一番驚いていたのは

…紅莉栖だった。

「いいいいいわね…それ…いいいただきます！」紅莉栖は、興奮し目を大きくして凝視する。

「何をいたただくんだ紅莉栖！」

「激写…」萌郁がさかさず携帯で撮影する。そして、当然の如く一斉送信しようとする。

「頼むそれはやめてくれ萌郁！萌郁さん！！！」

「もう…おくっちゃった…てへ（はあと）」

「ありがとう！萌郁さん！」紅莉栖は手放して喜ぶ。

「なにがありがとうだ紅莉栖！このクリ腐ティーナ！！！」

「さー盛り上がって参りましたニヤw」

「いやー楽しいねえ。もぐもぐ。」まゆりはいつものじゅーじゅー唐揚げを食べている。

「おおおい。まゆり！たのむ助けてくれ！」

「何言ってるのオカリン、ルカ君の気持ちをちゃんと受け止めてあげなきゃー。」

「お前も酔ってるだろ！！！」

「誰か、誰か助けてー！！！！！！」ルカ子に抱きしめられている岡部の叫びがラボに響いた。

幸い、ルカ子はアルコールに弱かったのか、すぐに酔いつぶれた。

「しかしてんやわんやだったな…酔ってないの俺だけか…。」

「まず…フェイリス！大丈夫か？帰れるのか？」

「にゃー大丈夫ニャー。でも、しばらくここにいるニャー。」

「本当に大丈夫か…。」

「で、と。潰れてしまったルカ子はラボに泊まらせてって、家にどうやって報告するんだ…。」

「あ、ルカ君電話してたよ？ここに泊まるって。「まゆりが言った。

「本当か？よく電話できたな…。」

「ん？まゆりは大丈夫なのか？」

「うん。飲む前に唐揚げ沢山食べたからかな？」

「そうか…。じゃ、ルカ子の面倒を頼めるか？」

「もっちろん！」

「萌郁は…。」

「私は…どうしようかな…」

「見た感じお前は酔ってそうにないな。安心したぞ。」

）

「だから、なんでメールするんだ萌郁…」

えへへーものすごく気持ちいいなーねね岡部君…

ちよつと二人でどこかいかない？キヤツ（はあと）

「…お前もここに居てください、お願いします。」

「で、紅莉栖は…」

「あ、あたしは大丈夫。そんなに酔ってないし。」

「そうか、じゃ送っていくぞ。」

「ええ！？いいわよ、別に。」

「何を言ってるんだ、この前も一緒に帰ったがホテルまでの道、安  
全って感じでも無かったぞ？」

「このおせつかい焼き！」

「なんだと!?!」

「ほらほら、紅莉栖ちゃん。オカリンに送らせてあげて？」

「おいおい、まゆり。それではまるで俺が、紅莉栖を送っていきたいのではないか。」

「え、違うの？」

「…」岡部は無言になる。

「…ええ！？もう…このバカ岡部！分かったわよ！」紅莉栖は、うれしそうに玄関に向かう。

「すまん、まゆり、後は大丈夫か？」

「大丈夫だよー。ルカ君と萌郁さんもフェリスちゃんもいるし。」

「それに本当に楽しかったよ！ありがとうオカリン！」

「そうか…それはよかった。」

一度はこの集まりをやめようかと思ったが、それではまゆりが気にしてしまうし、はっきりするとフェイリスが言ったのだった。フェイリスに聞いてよかった。

「じゃ、紅莉栖を送っていく。」

「うん。気をつけてね！」

「戸締りをしっかりな！まゆり。」

「オツケーー!!」

ガチャン。岡部はドアを閉めた。

振り向くと紅莉栖が壁にもたれている。

「大丈夫か？紅莉栖。」

「大丈夫、大丈夫、これぐらいの階段…」紅莉栖は一段目からいきなり踏み外そうとしていた。

「おおおい!!紅莉栖!ちょっと待て!」岡部は紅莉栖の腕を掴んで止めた。

「紅莉栖、本当に大丈夫か？」

「だから、大丈夫だって言ってる…」足元がふらついて、岡部にもたれる。

「おおい、まったく脚に力が入ってないぞ」

「ほら、紅莉栖。」岡部は、紅莉栖の前にしゃがみ、背中を出す。

「え、ななななにやってるのよ岡部!」

「何をつて、お前をおんぶするんじゃないか!」

「いいわよ!そんなの!」



「いいから、乗れって！ふらついていたら危ないだろ！」

「ちょ…分かったわよ！変な所触ったら、頭殴るからね！」

「いくらでもなぐるがいいー！」

「何言ってるのよ！もう…」紅莉栖は、岡部に覆いかぶさった。  
(おんぶしてもらうなんて、何年ぶりよ…)

岡部は、紅莉栖をおんぶして階段をふらふらと降りていく。

「ニヤフフフフ！！！！大々大成功ニヤ！！！！！」

フェイリスはドアの外の二人の会話を聞いていた。

「ニヤハハ…くーにゃんとうまくいくといいニヤ凶真。」

「フェリスちゃんありがとう。」

「お安いご用ニヤ！これでよかったのかニヤ？まゆしい。」

「うん。だって、紅莉栖ちゃん、オカリンと一緒にいた時間殆ど無かったもん。」

「本当に、いい子ニヤ…まゆしい。フェイリスは、まゆりを抱きしめる。」

「ニヤフフフ…、実はアルコールは少しでちょっと他のものを入れたのにゃ…」

「だ、大丈夫なの？フェリスちゃん…」

「んー。どっちかというと、凶真が大丈夫かニヤ？みたいニヤw」

「…フェリスちゃん…」さすがに岡部の身を心配するまゆり。

?????

そして、状況がまったく把握できない萌郁は携帯を持ったまま困った顔をするだけだった。

**背負の岡部（前書き）**

岡部視点です。

## 背負う岡部

紅莉栖を背負った岡部は、ふらつきつつも紅莉栖のホテルを目指して歩いていった。

「ひゃっ！」紅莉栖が声を上げる。

ボカッ！

紅莉栖は岡部の頭を殴った

「いった！なんだ紅莉栖！」

「あんたさっき、わたしのおおしり触った！」

「ちょっとは触れたかもしれんが、触ってはおらん！」

「このヒロ岡部ー！」

「どっしてそうなるー！」

「うるさいー！ささと連れてけー！」

(こ、この女…)

(馬鹿岡部…ちょっと色々な女の子に優しすぎるのよ…)

「ぐぐぐ…」

「今度はなんだ岡部…」

「ス、ストッキングがすべるぞ紅莉栖…」

「やつ！あつ！ちょっとやめてよ！太もも撫でるなあ！」

「撫でるか！滑っているんだ！」

「もう岡部！ちょっと一回、下ろして！」

「お、おう…」

降りた紅莉栖はまた岡部の背中に覆い被さる。今度は、少し高く岡部の首に腕を回す。

よっ！岡部は立ち上がる。

「これなら…どう？」紅莉栖がたずねる。

「い、いいんじゃないか？」

（胸がおもいつきり当たってるが言ったら殴られるからやめておこ  
う）

「ふふふ…」紅莉栖が笑う

「何がおかしい、紅莉栖？」

「何か懐かしくって…ちょっと子供の頃を思い出しちゃった。」

「そうか…」

「はあ…いい思い出だけだったらな…」

…岡部には紅莉栖の言葉の意味が痛いほど分かる。

俺を刺したのは、紛れも無く紅莉栖の父親。

しかも、紅莉栖は自分の書いた論文を自分の父親が盗む事も経験している。

ろくでもない父親かもしれないが、小さい頃には父親とのいい思い出もあるだろう。

いい思い出がある分辛いとも言えるな…

…

「そんなにいいなら、いつでもやってやるぞ紅莉栖。」

「うん…」

(うん？今、うんって言ったか？紅莉栖が？)

「…紅莉栖？」

「なに…パパ…」

「おい…紅莉栖？」

スー…

「寝たのか…。しかしパパか…。紅莉栖にとっては、いつまでも続く苦しみなのかもしれんな…。」

「いやしかし、これは…いいな…」

自分が命をかけて守った愛する女の子を背負い、その子が安心しきって背中で寝ている。岡部は背中で紅莉栖の体温や呼吸や拍動を感じている。とても大きな幸福感があった。

「お、かべ…。」

「ん？なんだ？」

「私のプリン、食べた…でしょ…。」

「プリンってwwwwクツクツクツwwww寝言かwwww」岡部は笑うのを堪えている。

「はー、いやこれは楽しいぞ…しかし楽しい時間は短く感じる。か。」

それからすぐに岡部は、紅莉栖の泊まっているホテルに着いてしまった。

「さて、どうするかだな…。出来たら起こしたくはない。

とりあえず、このままフロントにいつてみるか…。」

岡部は、紅莉栖を背負ったまま玄関に入り、フロントに向かう。

「すみません。えっと、牧瀬紅莉栖さんのお部屋をお願いしたいのですが…。」

フロントのスタッフが、岡部に背負われた紅莉栖を見る。

「申し訳ございません。防犯上の理由として、お名前と身分を証明できるものをお願いします。」

「ああ、そうですね。ちよつとまっけてください。」

紅莉栖を背負ったまま、財布を出す。そのままフロントに置いた。

「岡部倫太郎です。財布の中に、すみません、学生証があるのでみてください。」

（いや、良く考えると…この状況ってまずくないか？）

「…それでは失礼します…。」

フロントのスタッフが、少し考えている。

（そりゃそうだ…。何日も連続で滞在してる紅莉栖が突然男に背負われて戻ってきたら

誰でもおかしいと思うに決まってる。それに俺は学生だ…信用性が微妙だろう）

「了解しました。お部屋はこちらになります。」

フロントの男が、部屋のカードキーを岡部の前に出した。

「失礼ですが…。フロントの男が話しかける。」



「は、はい！？なんででしょうか？」岡部がびくつく。

「貴方が、牧瀬様の探されていた方でしょうか？」

「え、そんな事を？」

「ええ…何日も何日も探していらっしやっただので…」

「そうですか…見つかってよかったです。ごゆっくりおくつろぎください。」

「ありがとうございます。」（いい人でよかった…）

エレベーターに乗り、部屋の階まで上がる。

部屋のカードを差し込み、ドアを開けて体ごと部屋の中に滑り込んだ。

「ふー。さすがにちょっと疲れたな…。とりあえず、ベットに寝かせるか…。」

岡部はベットに座り、紅莉栖をゆっくりとベットに横たわらせる。

さすがに、紅莉栖の体全部までベットに乗らない。

横たわる紅莉栖は、静かに寝息を立てている。少し着乱れて無警戒で寝ている仕草がとても可愛らしいと岡部は思った。

……。岡部は、紅莉栖を見ている。ふっとある言葉が頭をよぎる。

「凶真はもう少し、ガオー！っていいと思っつよ？」

「いいいいかん、いかん！何を考えている俺は！」

「…ちよつと休憩だ…。」岡部は、ここまでほとんど休まず来ていた。床に座りこむ。

「そつだ何か…飲み物は…つと。」立ち上がり冷蔵庫を開けてみる。いわゆる高い飲み物以外何もなかった。

「ぬつ…。」

「う、うううん…あれ？ここは？」

「お、起きたか紅莉栖。」

「あ、岡部…つてなんでここにいるのよ…！」

「なんでつて、お前をおんぶして、寝てしまったからここまで連れてきたんじゃないか！」

「あ、そうか…私寝ちゃったんだ…じゃない！！ちよつと部屋から出つててよ…！」

「いきなりなんだ!？」

「いいから！ほら…！」

岡部は部屋の外に押し出される。

なんだつてんだ…紅莉栖の奴…。追い出された岡部は、ホテル近く

のコンビニに向かった。

「ふう…それにしても紅莉栖の寝顔は…携帯で撮ればよかったか…。」

岡部は、ドクペで喉を潤す。

「さてと、追い出されたことだ。帰るとしよう。」

）

「ん？なんだ？紅莉栖からか…」

「どうした？」

「…さっきは「めん…」」

「べつにかまわんど。俺もおんぶがあんなにいいものとは思わなかったしなw」

「いいものって…このHENTAI!」

「なんでそうなる！もっと純情な感覚だぞ!」

「自分でいっな!」

「グググ…こ、この…まったく、もう用がないから切るぞ。」

「あ！ちよつとまって！…今、どこにいるの？」

「コンビニだ。もう帰るところだが？」

「…塩のカップラーメン食べたい。」

「何だと？」

「塩のカップラーメンが食べたいの！あと、炭酸！」

「買ってこいっていうのか！？」

「そうだ！」

「お、お前！…ふー分かった分かった。買っていくよ。待ってな。」

「ありがとう…。待ってる。」

岡部は電話を切る。

「ふーやれやれ、俺の助手は世話が焼ける…。」「岡部はコンビニにまた入り、カップラーメンを探す。」

「またか！こんどはなんだ？」

「あ、凶真？」

「なんだ、フェイリスか。どうした？」

「今、どこかにゃ？」

「今どこかって、コンビニだ。」

「ちょうどよかったニヤ。」

「なんだお前も何か買ってこいというのか？」

「違うにゃ。凶真自身必要なモノにゃ。」

「俺が必要？なんだそれは。」

「男としてのすべきことにゃ。」

「ん？なんだそれは…ってお、お前！！」

「さすが凶真、すぐに分かったにゃ。ちょっとアドバイスしようと思っただにゃw」

「そんなもん買わん！」

「なに言ってるにゃ！男として、するべきことにゃ！あの稀代のマッドサイエンティストの凶真が、そんなものも買えないへタレとは思わなかったニヤ…」

「…切るぞ。」

「あ、ちょっと待つにゃ！」

岡部は通話を切る。

「ふーやれやれ…」

買い物を済ませた岡部は、紅莉栖の部屋に戻る。とりあえずノックをする。

その時、中から紅莉栖の叫び声が聞こえた。

「紅莉栖!!!」

ドアを開けようとするも、開くわけがない。オートロックだ。

「!!!!そうだ!!!」岡部は、白衣のポケットの中に部屋のカードキーを入れていたことに気がついた。

ドアを開けて、部屋に飛び込む、紅莉栖はいない。

「バスルームか!」

岡部は、バスルームらしきドアを思いっきり開けた。

## 紅莉栖と岡部（前書き）

紅莉栖視点から始まります。わかりにくい部分もあるかと思いますがご了承ください。

## 紅莉栖と岡部

紅莉栖は岡部を押し出して、ドアの鍵をかけた。

「はあっはあ…あーびっくりした…まったく岡部の奴、何も躊躇も無しに入るなっ！」

実は、部屋のところどころに着替えや下着が置いてあったのだった。

「見られていないわよね…」

「まったくもう…紅莉栖はとりあえず、部屋を片付ける事にした。」

）

「着信？誰からかしら…フェイリスさん？」

「フェイリスさん、どうしたの？」

「あ、クーにゃん？今、どこニヤ？」

「どこってホテルよ？」

「あ、お邪魔だったかニヤ？にゃふふ…」

「お邪魔って…もっ…」

「岡部なら部屋から追い出したわよ…」

「追い出したニヤ！？何をやってるにゃ…クーにゃん…」



「え、どうして?」

「どうしたもこうしたも、凶真と一緒に一夜を過ごすチャンスにや  
!」

「せっかく立ったフラグをくーにゃんがへし折ってどうするニヤー  
!」

「ええ!? そんな事言われても…」

「もう…くーにゃん…ラボでうまくいったと思ったのにニヤ…」

「え! そんな事考えてたの?」

「そうニヤ! まゆしいが凶真とくーにゃんが一緒に居られる時間を  
作ってあげたいって言うてくれたんニヤぞ!」

「それを知らなかったとは言え…くーにゃんはボキー! と折っちゃ  
ったニヤ…」

「そんな事言われても…今更…」

「な、何を言ってるニヤ!」

「くーにゃんの凶真を好きって言うのはその程度だったのかニヤ!  
!」

「それにくーにゃんはフェイリスが本気で泣いてたの見たにゃ!!  
いくらなんでも怒るニヤよ!」

「…フェイリスさん…」

「ごめんなさい。今から、岡部に電話してみる!」

「そうニヤ！その意気ニヤ！また、連絡待ってるにゃー。」

「うん。よろしくね！」

「さて…どうしよう…。うーん…悩んでる場合じゃないわ！とにかく呼び留めないで。」

紅莉栖は、岡部に電話をかける。

「…そっきはごめん」

「べつにかまわんぞ。俺もおんぶがあんなにいいものとは思わなかったしなw」

「いいものって…このHENTAI！」（ああ…何言ってるの私…）

「なんでそうなる！もっと純情な感覚だぞ！」

「自分でいうな！（また！何を煽ってるの私！）」

「グググ…こ、この…まったく、もう用がないから切るぞ。」

「あ！ちょっとまって！…今、どこにいるの？」

「コンビニだ。もう帰るところだが？（コ、コンビニにいるの！？それなら…）」

「…塩のカップラーメン食べたい。」

「何だと？」

「塩のカップラーメンが食べたいの！あと、炭酸！」

「買ってこいって言うのか!?!」

「そうだ！（お願い！岡部！）」

「お、お前!…ふー分かった分かった。買っていくよ。待ってな。」

「ありがとう…。待ってる。（ありがとう！岡部！）」  
すぐにフェイリスに電話をかけなおす。

「岡部が戻ってくるわ!」

「うんうん…よかったニヤ…。」

「でも、これからどうしよう…」

「どうしようって…これからはさすがフェイリスがどうこう言つて  
とじゃないニヤ。」

「それに、これからの二人の思い出にフェイリスが入り込むなんて  
できないニヤ!」

「もう、だいぶ突っ込んでる気もするけどニヤ、ニヤハハハ…」

「フェイリスさん…」

「あ、でもニヤ！クーにゃんの飲んだ飲み物に、フェイリス一服も  
ったニヤ!」

「…え？」

「くーにゃんがもつとアグレッシブになるようにー、ちょっちょつと入れたニャ！」

「…なん…だと…」紅莉栖は自分の体の変化を感じ取るうとしてい  
る。

「…ちなみに具体的にどうなるの？」

「それを言っちゃったら面白くないニャ！」

「…（…この人…いつか何とかしないと…）」

「とりあえず、会って話してみるニャ。ニャフフフ…」

「あー凶真が来るまえにシャワー浴びておいたらどうニャ？」

「…そのつもりだけど…」

「じゃ、くーにゃん頑張つてニャ！」

「ちょちょつとー！」

フェイリスは通話を切った。

「…言うだけ言って切ったわね…それにしても一服盛ったって…」

「とりあえず部屋は片付けたし、シャワー浴びよう…」

ザー

紅莉栖はシャワーを浴びる。岡部が戻るまであまり時間は無かった。

「それにしても…どうしよう…」

「一緒にいたいけど、一緒にいたくないような…」

「はあああ…もの凄くドキドキしてきた…」

紅莉栖はシャワーから上がる。

「…ふう…」

「いつもならバスローブだけなんだけど…」

紅莉栖は着替えを片付けている時に下着を用意していた。

上下揃いの淡いブルー。少しレースの入ったお気に入りだった。

「一応ね一応…」

そして、下着に手を伸ばした時、足元で何か走るモノを見た気がした紅莉栖。

「まさか…」

その予感は的中した。

「イヤアアアアア!!!」

紅莉栖の叫び声がバスルームに響く。

その刹那。

バスルームのドアが開いた。

「どうした紅莉栖！大丈夫か！？」

岡部の目に飛び込んできたのは全裸の紅莉栖だった。

「キャアア！！岡部！！」紅莉栖はすぐさまカーテンに隠れた。

「…一度ならず二度も！絶対に許さない！絶対に許さないから！！」

「しょうがないだろ！叫び声が聞こえたんだ！」

「うるさい！早くさっきの虫を退治しろ！」

岡部は足元にいる虫をティッシュにくるみゴミ箱に捨てた。

「…退治したぞ」

…岡部の目には紅莉栖の下着が映っていた。（淡いブルーか…悪くない…）

「早く出てって！お願い！」

「まったく…」ブツブツ言いながら、岡部はバスルームから出た。

紅莉栖はすぐに下着を着用して、バスローブを着た。

バスルームのドアを開けて顔だけを出す。

「岡部！ちよつと外の窓向いて！」

「なんだいったい…さつきから…」

「いいから！」

岡部が外を見る。それなりに高い場所にあるので眼下を歩く人が小さくみえた。

紅莉栖は、バスルームから小走りにベッドに潜り込む。

「もういいわよ！（うとうと恥ずかしくて顔から火が出そう…）」

岡部が振り向くと、ベッドのシーツが膨らんでいるのが分かった。ふう…まったく…岡部はため息をつく。

「買ってきた塩ラーメンと炭酸飲料はどうするんだ？」

「…そのテーブルに置いて…」

「はいはい…じゃ俺は帰るぞ…」

（うそ…そんなのだめよ…）

「バスルームにまだ虫がいないか見て！あとシャワーも浴びていいから！」

何！？バスルームの虫とシャワーを浴びる事は関係無…（何かおか

しいな…紅莉栖の奴…)

言いかけた言葉を岡部は飲み込み

「はいはい」とだけ返事をしてバスルームに入った。

「虫はもういないようだな…」岡部は熱いシャワーを浴びる。

(…前にもこんな事あったな…)

さすがに岡部にも今の状況の意味が分かってきた。

「何か…緊張してきたぞ…」

シャワーを浴びた岡部はバスルームから出る。

「ん？何か暗いな…」

部屋の明かりが物が見えるかどうかギリギリになっていた。

「おおい…紅莉栖…何も見えないぞ…」

「別にいいじゃない…節電よ節電(恥ずかしくて顔を見れないのよ…)」

声を聞くと、紅莉栖は相変わらずベッドに潜り込んでいるようだった。

「まったく…」

(そつだ…)(岡部は思いつく。



岡部は部屋のドアを静かに開けて、急いで部屋に戻る。

「紅莉栖すまん！急用が出来た！」岡部は叫び、ベッドの影に隠れる。

少し遅れて、開けていたドアが閉まった。

ボタン。

（え…そんな！）ベッドの中の紅莉栖は愕然としている。

紅莉栖はあわてて起き上がり、ドアに向かう。ドアを開けてみるも、岡部の姿は無い。

「ああ…。私ったら変に恥ずかしがって…、この結果か…。」  
しよげてしまう紅莉栖。部屋に戻る。

「フッフ…どうやら、重い岩戸が開いたようだな！」

部屋の中には岡部が居た。

「お、岡…べ…。」紅莉栖の目に映る岡部。

カーテンの隙間から漏れる月明かりに照らされた、紅莉栖に優しく微笑む岡部が居た。

ふらふらと吸い寄せられるように、紅莉栖は近づく。

紅莉栖は何も言わず岡部を抱きしめる。

紅莉栖…。岡部もまた紅莉栖を抱きしめた。

「はっ…」岡部に抱きしめられた紅莉栖は、体に電流のようなものが入るのを感じる。

(何だろっこの感じ…。ものすごく嬉しいし幸せ…)

紅莉栖は少し目をうるませ、岡部を見上げる。

岡部は、何も言わずに唇を重ねようとする。紅莉栖もそれに答える。

「ふうっ…」紅莉栖は、吐息を漏らす。お互い、そのまま何回も唇を滑らせるようにキスをする。

唇の滑る感触が紅莉栖を痺れさせる。

「あっ…。」突然、紅莉栖の脚に力が抜けた。

「紅莉栖…大丈夫か？」

「…うん…」紅莉栖は、腰が抜けてしまっていた。

「よし。」

岡部は、紅莉栖の膝を揃えて下から右腕を通す。左腕を紅莉栖の背中に回し、紅莉栖を持ち上げる。

少しフラつくも、そのままベッドに紅莉栖を横たわらせた。

横たわる紅莉栖は、岡部をまっすぐに見つめてる。

「…岡部…貴方と一緒によかった…」

紅莉栖は、岡部を迎えるように両手を広げる。

「俺もだ紅莉栖……」

岡部は横たわる紅莉栖を抱きしめ、またキスをする。

「んっ、あっ……」紅莉栖の吐息に次第に色がついていく。

二人は、お互いの愛を確かめるように抱き合い、触れ合う。

そして、二人は願う。この時間が永遠であってほしいと。



## 大失敗（前書き）

一度アップした後に、後ろに追記しました。申し訳ありません。よろしく願います。

## 大失敗

一夜明けて、ラボに戻った岡部。

ドアの前に立ち、インターホンを押す。

「はいはい。」まゆりが返事をする。ドアを開けた。

「オカリン。おはよー！トゥットウルー」

「ああ、おはよう！まゆり！」

「オカリン！すごいニコニコしてるねwwwよかったー」

「ありがとう、まゆり。」

「えへへへ。よかった、うまくいったんだね、（、（」

「ムニャーアアア…ニャニャー！凶真！朝帰りとはやりおるなお主…」  
ラボにはフェイリスが泊まっていた。

「で、どうだったニャ？男になれたかニャ！？」

「…」

岡部は何も言わない。にこやかな笑顔が一転、とてつもなく切ない顔をする。今にも泣き出しそうだ。

「…ど、ど、どしたニャ！？凶真！」

「察してくれ…フェイリス…頼む…」

「察しろと言われてもニヤ…」

「人は…いや男は、極度に緊張するとああなるのか…これが俺に言える精一杯だ…」

「ニヤニヤ？…どづいづことニヤ？…」

「…」フェイリスは考えている。

「…ニヤニヤア…！！！！」フェイリスは気がついて、耳まで一気に赤くなった。

「ななななな、何を言ってるニヤ凶真！もう！！」

「しょうがない、そういうことだ…」

「…づづづ…男にしか分からないニヤね…。」

「ああ…。」

「まゆしいにはさっぱりなのです…。」「まゆりは、理解できないのでしょげてしまっている。」

「まゆしいには、フェイリスが後で説明してあげるニヤ…。」

「…やめてほしいところだが…理解するにはそれしかないか…。」

「元気だすにや…凶真…」

「ああ、紅莉栖にも励まされた…。正直言つて、落ちこむなこれは…。」

フェイリスは、研究室の影にまゆりを連れて説明を始める。

「はいい！？えええ！？ふんふん…」

まゆりの奇声とも言える声が聞こえてくる。

二人が戻ってくる。

「オカリン…元気出して…」

「まゆり…やめてくれそれは逆に凹む…。頼むから普通にしてくれ…。」

「うん、分かった…。」

フェイリスは口を開く。

「でも、一晩一緒だったニヤ！それは凶真にとってはいい思い出ニヤ？」

「ああ、一生の思い出だ。余計なものまで思いだしてしまうが…。」  
「ぬつひつづつ…！！…フーハハハ！！…この鳳凰院凶真！これしきのじやで…（…）しょぼーん」

「凶真…」  
「フェイリスは掛ける言葉が見つからなかった。」



静寂が流れる。岡部自ら空気を変えるために話題を変えた。

「ああ、そうだ。まゆり、紅莉栖が明日の朝6時ごろに秋葉原を出発になりそうとか言っていたぞ？」

「明日！？そんなに早く？」

「チケットが取れたらしいな。準備はできているか？」

「うん大丈夫だよ」

「そうか。それならいい。」

「紅莉栖ちゃんは？」

「今は買い物に出かけているみたいだな。」

「そっかー。あ、それなら、みんなと一緒に買い物に行こうよ！」

「フェイリスは、そろそろ仕事に行かないとニヤ…。ごめんニヤまゆしい。」

「ううん！いいよ。それに、泊まってくれてありがとう。フェリスちゃん。」

「気にしない気にしないニヤ！フェイリスも一人で寝てばかりだから」

たまには人肌を感じたいにや。」フェイリスは話しつつ、岡部に目を移す。

！！岡部はその目の意味を察知して体を硬直させた。

「じゃ、フェイリスは行くにや！またにやー。」

「いつてらっしゃーい！」フェイリスは手を振り、ドアを閉めた。

まゆりが振り返る。

「オカリン？朝ごはん食べた？」まゆりが、岡部に尋ねる。

「いや、まだだが？」

「まゆしい、作ります(、(」

「できるのか？」

「まっかせて！食べたら、紅莉栖ちゃんに電話して一緒に買物に行こうよー！」

「そうだな。向こうで必要なものもあるだろうし。」

まゆりは、小さなキッチンに向かい料理を始める。

「んふふ〜」

その後姿を見ている岡部。まゆりの家庭的な雰囲気、安らぎを感じている。

しばらくして

「できたよー。」まゆりは、テレビを見ていた岡部を呼ぶ。

「おお！できたかって…」

「…朝から…唐揚げか…。」

「ええ、だめだった？（、、（）」まゆりは少し顔を曇らせる。

「いや！いいぞー！まゆり！」岡部は半ば押しこむように唐揚げを食べる。

「よかったー。」まゆりは岡部に笑顔を見せる。

「まだ、おかわりもあるからね（、、（）」

「…これは…腹が厚くなるな…」

少し遅目の朝食をすませた二人は、紅莉栖と待ち合わせる。

「あ、いたいた！紅莉栖ちゃん！！」

「まゆり！おはよう。って…岡部？顔色悪いわよ？大丈夫？」

「いや…大丈夫だ…すこし食べ過ぎただけだ…」

「そう…。あ、昨日の事は、気にしちゃダメよ岡部…」

「ああ、すまん紅莉栖…」

「謝らないで、昨日は本当に嬉しかったわ、それにまた次の機会が  
あ…。」言い出して、紅莉栖は顔を真っ赤にする。

それに気がついた岡部もまた顔を赤くした。

「んふふふ…。」二人共仲良く、まゆしい嬉しいのです！

「もう、やめてよまゆり…。」

「あはははは。」まゆりは二人に笑顔を見せる。

岡部の右に紅莉栖、左にまゆりが立ち秋葉原の中央通りを駅に向か  
って歩いて行く。

「とりあえず、俺の案内できるところは電化製品、パーツのたぐい  
だが…。欲しいものはあるか？」

「うーん…とりあえずはいいかしら…。むしろ、ちょっとまゆりに  
聞きたいことがあって…。」

「何々？まゆしいに聞きたいことって？」

「えつとね…。ごめん岡部、ちょっと向こう行って！」

「なんだいきなり…岡部はピンと来た。」

「はーん…。さては、クリ腐ティーナ…同人の類だな！」

「ええええ！？そ、そんな訳ないじゃない！馬鹿じゃないの！？」

「何を言っている、俺は知っているのだ…お前が実は、腐であると！」

「どこの同人だ？んん？」

「こ、この…久しぶりにむかつくわね…」

「オカリン！紅莉栖ちゃんをいじめちゃだめです！」まゆりは、岡部に怒る。

「まゆりー、ありがとうー。」

「むづ…。どう考えても、1対2にしかならないぞ…。」天を仰ぐ

岡部。

「分かった分かった。二人で行ってきてくれ。俺は、そのあたりをぶらつく…」

「ってすでにいないじゃないか…。」すでに、二人は紅莉栖の求めるものを探し行っていた。

「何か…寂しいな…。」岡部は、胃腸薬を買いに向かった。

岡部は、携帯をしきり見る。

「おい…一体何時間探すつもりだ…。」

すでに、時間は昼を過ぎて夕方に近くなっていた。  
完全にぼっちにされた岡部はいらつきはじめている。

)

「まゆりからメールか…」

ごめんオカリン。紅莉栖ちゃんが夢中で手が付けられないよ…  
でも、本当に楽しそうだからもうちょっと一緒にいるね。ごめんね  
オカリン！

「あいつ、まだ漁ってるのか！！まったく…しょうがないな…」

俺はラボに帰っているからな。

俺のことはいいから、二人で楽しんでくれ。気をつけてな。

岡部は返信する。

「ああ、そうだ。明日二人を見送るために、全員に時間を知らせて  
おくとするか。」

「しかし、集まるのか？早朝だしな…」岡部は、メールを送った。

「さて、ラボに戻るか。」

ラーメンを食べるために、岡部はコンロに火をかける。

「それにしても、あいつらいつまでやってるんだ…」

外はすでに暗くなり、夜になっている。

携帯に着信が入る。紅莉栖からだった。

「岡部？ごめん！こんな時間まで！」

「あのおなあ…明日早んだろ？もう少し考えて…」

「だからごめんって言うてるじゃない！」

「なんで逆切れするんだよ！」

「あ、ははーん…寂しかったんですね。分かります。」

「ググツ…このクリ腐ティーナめ!!」

「なんだと!？」

「なんだよ!」

（ほらほらー紅莉栖ちゃん…喧嘩しちゃだめだよー？）

そばにまゆりもいるようだった。

「…岡部、ごめん…」

「…ああ…何にしても少しぐらい連絡が欲しいところだ。」

「うん、分かったわ。岡部は寂しがり屋メモメモと…」

「こ、この…!…!…って…こんなやりあいも、今日までか…」

「なにより突然…電話ならいつでもできるでしょ…」

「ああ、まあそうだな。」

「…今からそっちに行くわ。」

「今、どこにいるんだ?」

「中野…」

「…気をつけてな。」岡部は通話を切る。

「中野って あいつ…。」

とりあえず、テレビを見る岡部。

「そっいえば、ダルの奴どうしたんだろうな。何も音沙汰ないが…」

ピンポーン。

インターホンが鳴る。二人が帰ってきた。

「ただいまー。オカリンごめんねー。」



「ふう…。岡部ごめんね。さすがにほったらかしだったわ。」

「まあ、気にするな、…紅莉栖…ってそれ買ったのか？」

「ええ、そうよ。同人誌だけじゃないわよ。」

「いや、中身の話じゃなくてだな、キャスター付きのカバンだ。それ買ったのか？」

「…お前…本物だな。」

「紅莉栖ちゃん、すごいんだよ！途中でカバン買っちゃって。」

「無かつたら、移動が大変だったよ！。」

「中野まで行くぐらいだからな…。」

「さて、これからどうするか。お前らは食べてきたのか？」

「まだよ。」

「まだです。お腹ペコペコです（、（「二人は答える。」

「そうか…ではどこか食べに行くか。」

「どこに？」紅莉栖は尋ねる。

「せっかくだ、キッチンシローでどうだ？紅莉栖のおごりで。」

「わ、私の？分かったわよ…。」

3人は、ラボを出てメイクイン正面のキッチンシローに向かった。

「美味しかったです！紅莉栖ちゃんありがとう！」

「いいのよまゆり。付き合わせちゃったし。」

「しかし…ミンチカツを2食分食べるか…まゆりよ。」

「それで、そのスタイルなのね…羨ましいわ。」

「ん？別に…羨ましく思う必要もないんじゃないか？」岡部は口にする。

「ちょっと、何を言ってるのよ…」紅莉栖は顔を赤らめ声を抑えて言った。

「思った事を言ったまで…だ。」岡部は照れくさそうにする。

「…ありがとう。」紅莉栖は岡部の白衣を掴み顔を伏せた。

まゆりは、上機嫌でスキップしている。

3人はラボに戻った。

「そつだ、ラボメンには紅莉栖とまゆりを送り出すように秋葉原駅に集合をかけたからな。」

「朝早いのに…大丈夫なの？」

「案ずるな、我がラボメンの結束は共有結合よりも硬いのだ！」

「…本当に温かいわね…」紅莉栖は嬉しそうに微笑む。

「んーと…はい！まゆしいに提案があります！」

「まゆり、発言を許可しよう。」

「紅莉栖ちゃんのホテルで3人でお泊まりです！」

「…なん…だ…と…。」

「3人いれば、寝坊しなくてすむかなって）、（）」

「間違いじゃないわね…。」紅莉栖は岡部に目配せする。

「ん…、分かったまゆりの案を採用しよう。」

「やったー」

「紅莉栖はいいのか？」

「異論は無いわ。」

「よし、荷造りができ次第向かうとしよう…ってこの前はまだしも、3人は大丈夫なのか？紅莉栖。」

「そうね…ちょっとホテルに電話しておくわ。」

「よろしく頼む。」

まゆりの荷造りはすぐに終わり、ホテルに向かった。

紅莉栖が先にフロントに向かう。

「うん、ちょっと無理っばかったけどOKでたわ。」

「よかったです(´、´)」

「部屋の準備ができ次第行きましょう。」

紅莉栖が部屋まで案内する。3人は部屋に入る。

「うわーい、ばふー！」まゆりがベッドに飛び込む。

「おいおいまゆり…。」岡部がたしなめる。

「えへへ。3人でお泊まり嬉しいな(´、´)」

「そう、よかったわ。じゃ岡部先にシャワーなりどうぞ。」

「俺が？いいのか？」

「ええ、いいわよ。」

岡部はバスルームに入って服を脱ぐ。

「紅莉栖の奴…俺に虫がいないか確かめさせたな…。まあいいか。」

岡部は熱いシャワーを浴びる。

「はあー、やはり違うなー。気持ちがいい。「ラボの小さなシャワーとは違う豊富な湯量だ。」

「ふう…出たぞー。」岡部はバスルームから出る。

「じゃ！一緒に入るっか！紅莉栖ちゃん！」

「そうね！岡部…覗いたら分かってるわね？」紅莉栖は岡部を睨む。

「了解した…」

「もう、まゆりー！」「あはははは」

バスルームからは、笑い声が聞こえてくる。

「ふふ…少し前の事だったのに、ずいぶん昔に思えるな…」

ラボで、思いきりドアを開けて大変な目あった事を岡部は思い出した。

ベッドに寝込み、携帯でラボメンからの連絡を確認する。

「ふいー気持ちよかったー。」しばらくしてまずまゆりが出てくる。

「紅莉栖はどうした？」

「紅莉栖ちゃんは髪を乾かしてるよ。」

「そうか。」

「ねね、オカリンの隣に寝転んでいい？」

「ああ、いいぞ。ほら。」岡部はベッドの真ん中に移動する。

「やったー、ゴロゴロー。」まゆりはベッドの端から転がって岡部にくっつく。

「うふふ…オカリンからいい匂いがするね。」

「いいボディソープなんだろう。」

「ううん…なんかね…ものすごく落ち着く匂いがするの…」

「そうか？」岡部は自分の腕を鼻に寄せる。

「うん…スー…スー…」

「まゆり？」

岡部が見ると、まゆりは完全に寝てしまっていた。

「そんなに疲れていたのか？まさにバタンキューだな。」

紅莉栖が出てくる。

「おい、まゆりが寝てしまったぞ…」岡部は寝たまゆりを気づかい小さな声で話す。

「そう…やっぱり…」

「ん？どういう事だ？紅莉栖。」

「実はね、フェイリスさんから聞いたんだけど」

「昨日多分一睡もしなかつたらしいのよ、まゆり。」

「なんだって…。」

「フエイリスさんも一緒に起きてたみたいで朝方にちょっと寝ちやっただけ」

「まゆりは多分一睡もしてないって。」

「まさか、記憶のせいかな？」

「おそらく…夢で見ってしまうのが怖いのかも…無意識に。」

「でも今は寝ているぞ？」

「そりゃ、岡部がいるからに決まってるじゃない。」

「だから、3人で泊まるうとしたのよ？あ、別に岡部とまゆりでラボに泊まってもよかったのよ！もちろんん！でもまゆりが3人でっというから…」

「分かった分かった紅莉栖。（一人は寂しいって言えないんだろう）」

「でね…ちょっと考えたんだけど、今はまゆりは日本にいたべきよ。」

「おい…治療はどうするんだ？」

「治療はするべきだと思うわ、でもまゆりがアメリカに行くなら…」

「岡部も一緒よ？」

「…確かに…ここまで記憶が生活に影響があると治療も難しいか…。」

「そうね。薬って手段もあるけどまゆりを思えば、絶対に使いたく無いわ。」

「紅莉栖にとってもまゆりは大切な存在なんだな。」

「当たり前じゃない。」

「ふふっ…何か自分の事のように嬉しいな。」岡部は笑う。

「そうか。俺の準備はさすがに出来ないな…実の所、パスポートが無い…」

「慌てる事はないわ、岡部が居るなら私も安心なもの。」

「そうか…明日も早い…寝るとするか。」

「そうね。」

紅莉栖は岡部の隣に寝転ぶ。

「ねえ…岡部」

「なんだ？紅莉栖…」

「前に、まゆりと一緒に寝てた時って…どんな感じだったの？」

「どんなとは？」



「その…なんて言うか…」

「ああ腕枕をしてやったかな…」

「腕枕…」

「紅莉栖も腕枕して欲しいのか？」

「ええ！？そ、そんな訳…」

「ほら紅莉栖。」紅莉栖の頭の上に腕を出す岡部。

「…紅莉栖は何も言わずに頭を上げる。岡部は頭の下に腕を入れる。」

「痛くない？」

「大丈夫だ。」

「…いいわね…これ。」

「そうか…」

しばらく静寂が流れる。

「ねえ岡部？」

「なんだ？」

「…まゆりに岡部に抱かれるように寝たって聞いたんだけど…」

「…そんな事まで話していたのか…」

「まゆりには内緒よ…でね、ちょっと…」

「ああ…紅莉栖はそのまま向こうを向いてくれ。」

「…」

「あとちょっと頭を上げて。」

背を向けた紅莉栖にくっつくように岡部は移動する。  
紅莉栖の背中の中のラインと岡部の体の正面のラインが重なる。

腕枕をしていない方の腕は紅莉栖の腰に置かれた。

「はあ…」紅莉栖から吐息が漏れる。

「どうだ？紅莉栖…」

「どつて…こんなの…ドキドキするに決まってるじゃない…」  
「それにもすごく幸せな感じ…」

「そうか…よかった…」

「ああ…あーダメダメ…」

「どうした？」

「気持ちいいから気分が高まっちゃっ…」

「俺もだ…」

二人はさっきの体勢に戻る。

ふう…二人からため息が漏れる。

「ちょっと危なかったな…俺」

「あ、危ないって…バカ…」

「しょうがないだろ…」

「ふふっ…ねえ岡部…」 紅莉栖は岡部に顔を向ける。

「ん？」 岡部は紅莉栖の動きの意味が分かる

二人は静かに2回唇を重ねた。

「…うん…岡部おやすみ…腕痛くなったら外してね…」

「ああ…」

紅莉栖は岡部の腕を枕にして、岡部の脇に寄り添う。

3人は静かに寝息を立て始めた。

秋葉原駅に、時間通りラボメンは皆集合していた。しかし、一人多い。

そして一人、見てすぐに分かるぐらい緊張していた。ダルだった。

「み、みんなに紹介するお！」いきなりダルが話した。

「こ、こちらがああままま…」

「ダル君：緊張しすぎよ。」ダルの隣にいる女の子が笑いながら話す。

「阿万音 由季です。よろしくお願いします。」

「はーかわいいねえ（、）やったねダル君！」まゆりが喜ぶ。

「何も聞かされなかったのは親友としてちょっとショックだぞ、ダル。」

「あはははは」皆が笑う。

「あーオカリンごめんお。ほらあれだったし。」ダルが言う。

「そうだ！皆に報告がある、まゆりはやはり日本に残る事になった。」

「ニヤニヤ！？それは本当かニヤ？」

「ああ。もう少し準備期間を置こうと思ってな。」

「まゆしいには悪いとは思っただけど、実はかなりお店の人員に困ってたニヤ…。」

ふうー。フェイリスは安堵のため息をつく。

「人手が足りないのか？」

「もう、本気で猫の手も借りたいぐらいだったニヤ。」

「ふむ…（今度、旅費を稼ぐためにも俺も働けないか聞いてみよう）」

「おつといかん！話は移動しながらだ。とにかく空港に向かおう。」

「ちよつとごめんニヤ！」

「どうしたフェイリス？」

「記念に皆で写真を撮りたいニヤ。」

ラボメン一同賛成する。

フェイリスの執事が皆を誘導して、クロスフィールドをバックに3回撮った。

「出来たら、クーニヤンにも送るニヤ。」

「ありがとうフェイリスさん！」

「で、フェイリス、車も用意したニヤ。みんな乗ってニヤ」

「みんなでワイワイ話せるにゃ！」

「さすがだなフェイリス、ありがとう！」岡部が礼を言う。

「ニヤフフフ、お安御用ニヤ！」

フェイリスが用意した車に乗り、一路空港へ向かった。

## 別れと始まり

入国審査を終えて、皆の元に戻る紅莉栖。

突然、岡部一人を残し他のラボメンは後ろに下がった。

「お、おい！お前ら…」

「いいからほらオカリン！行って！」まゆりが岡部の背中を押す。

岡部が紅莉栖の前に進む。

「紅莉栖…」

「何？って何よ岡部、その顔！」

「な、なんだ？」

「あの鳳凰院凶真さんが、ものすごく寂しそうな顔をしてるんだが  
w」紅莉栖は笑う。

「…。」何も言わずに岡部は紅莉栖を見つめる。

「もう…岡部…なんとか言っつてよ…」

「紅莉栖は…どうなんだ…？」

「…」紅莉栖は何も言わずに岡部の胸に頭を当てる。

「寂しいに決まってるじゃない…馬鹿…」

「すまん…」岡部は紅莉栖を抱き寄せる。

「うん…」紅莉栖もまた岡部を抱きしめた。

抱き合う二人を皆が見守っている。

二人は、お互いの体の感触の記憶を残そうとしっかりと抱き合っている。

しかし、時間が迫ってきていた。

「ごめん岡部…もういかないと…」紅莉栖は顔を上げる。

二人はゆっくりと惜別のキスをする。

二人は見合う。

「岡部、まゆりとアメリカに絶対に来て」

「ああ必ず行く！」

「連絡もしてね…」

「もちろんだ！」

紅莉栖が岡部を見つめながら、岡部の傍から離れる。

そして、ゆっくり後ろに向く。



岡部には、紅莉栖の行く先にゲートが見えた。

そこに向かい、紅莉栖が歩いてゆく。

岡部には否応無しにある光景が脳裏に浮かぶ。

秋葉原駅で別れたあの光景。

(ここで紅莉栖に行くな！と言ったらどうなるんだろう…)

(いや…大丈夫だ…もう紅莉栖は消えたりなんかしない。)

岡部はポケットにあった携帯をおもむろに取り電話をかけた。

)

「誰よ…こんな時に…」

「あの馬鹿…」

紅莉栖は携帯に出る。

「なによ…わざわざ電話して…」

「…紅莉栖、俺はお前を愛してる」

紅莉栖は振り向く。

岡部は、携帯を耳に当てたまま、今にも泣きそうな顔で思いきり手

を振っていた。

涙を流しながら、紅莉栖は言う。

「この馬鹿岡部！愛してるって今度ちゃんと言ってよw」

「はははは、すまんwww」

二人は泣きながら笑っている。

紅莉栖は、またゲートに向かって歩いて行く。立ち止まり、また皆に向かって手を振った。

そして、意を決してゲートを通って歩いて行った。

「行っちゃったニャ…クーニャン…」

「…寂しいね…（、・、・、）」

岡部は流れた涙を白衣の袖で拭きながら、戻ってくる。

「凶真さん…」

「オカリン…」

「岡部君…」

ラボメンが皆、岡部を気づかう。

「みんな、ありがとう。」

「だが、大丈夫だ！やる事は決まっている！」

「そうだなとりあえず…フェイリス」

「どうしたにゃ？」

「メイクイーンで働けるか？」

「ニヤニヤ！？凶真がメイド服かニヤ…誰特ニヤ？」

「どうしてそうなる！執事としてだ！」

「執事がーいいね！それにオカリンと一緒に働ける（、（、（まゆりが跳ねて喜んでいる。」

「ふーむ…執事…いいアイデアにゃ。凶真、いいでしょう。やりましょうニヤ」

「よろしく頼む！」

岡部の活気あふれる顔を見て、ラボメン皆安堵の表情を浮かべた。

「さあラボメン諸君、戻るとしよう。」

岡部は皆を引き連れて帰路についた。

## 紅莉栖の消息

岡部はメイクイーンで働き始めた。

執事服は、フェイリスの執事から借りている。

勤務中だが、岡部は遠くを見つめたまま立ち尽くしている。表情も暗かった。

「はあ…。」

フェイリスが岡部の様子を見ていた。

「まゆしい…クーニャンから連絡はあったのかにゃ？」

「ううん…何にもないんだ…。」

「メールしても返事が無いし、電話してもかからないし…。」

「ふー、そうニヤ…。」 フェイリスがため息をつく。

「フェリスちゃん、まゆしい、オカリンを元気にさせられなくて」  
めんね（…）

「ニヤニヤ？まゆしいは気にしないでニヤ。」

「むしろ、今の凶真の雰囲気にもロメロになったお客（女子）がひっきりなしニヤ」

「…凶真のポテンシャルは計り知れないニヤ…でも、その原因を知ってるだけニヤ…。」

「心配だよね（…）」

「そうニヤ…。さすがにもうクーニヤンに何かあったとしか見え無いニヤ…」

「もう1週間か…」

フェイスが時計を見る。

「あ、まゆしいお疲れさまニヤ。凶真と一緒に上がってニヤ。」

「え、一緒に？」

「凶真を励ましてほしいニヤ…これはフェイスには出来そうになりニヤ…」

「うん、分かった！ありがとうフェリスちゃん！」

二人はラボに戻る。

岡部はソファーに座り背もたれに頭を乗せる。

「ふー。」岡部は考える。

「何の連絡もしてこないなんて何が紅莉栖に起ったんだ…」

「こんな事なら、向こうの家の電話番号ぐらい聞けばよかったか…」

「とにかく、無事なら言うことは無いんだ。」

「何とか消息を知るすべは無いか…もう1週間だ…どこに居るんだ…」

「オカリン…大丈夫？」

まゆりが岡部の横に座り、岡部の手を両手に持ち膝に置く。

「すまん…まゆり気を使わせて…」

「うっん！オカリンの気持ち良く分かるもん！」

「それに、まゆしいも気になるの…。」

「まゆり…。」

「そっだ！オカリンもすまない…じゃなくて

ありがとうって言うべきだよ）、（「（（

「ははっ…そっだなまゆり、ありがとう。」岡部は、まゆりの頭を撫でた。

「えへへ…。」

ピンポーン

ドアのインターフォンが鳴った。

「はいはい。」まゆりが出る。

「オカリンオカリン、店長さんが呼んでるよ？」

「ミスターブラウンが？家賃はまだのはずだが…」

まゆりがドアを開ける。

「おう、岡部。久しぶりに顔を合わせるな。」

「何か知らんが、うちの店の電話にお前の名前を知る人からかかって来たぞ?」

「え? 誰です?」

「牧瀬って言ったぞ。」

「!!!!!! 出ます!」

「ああ、下に萌郁が居る。保留中だ。」

岡部は慌ててラボを出で、階段を飛び降りた。

「あいつ...おっと、まゆりちゃん? だったか?」

「は、はい!」

「ここ、ちゃんと戸締まりしてくれな。邪魔したな。」

ミスターブラウンはラボを出た。

岡部が電話に出る。

「もしもし!?!」

「あなたは?」

岡部の耳に入った声は紅莉栖の声では無かった。落ち着いた大人の

女性のようにだった。

「お、岡部倫太郎と言います。」

「よかった…やっと紅莉栖を知る方にたどり着いたわ…」

「私は、紅莉栖の母です。」

「母!?!」

「貴方の事は、あの子が日本に滞在している間、色々聞かされたわ。」

「最近になってやっと貴方の名前が分かって、もの凄く幸せそうだったのに…」

「電話したのは他でも無いの。」

「紅莉栖が行方不明なのよ。」

「えっ…」岡部の体から力抜ける。

「空港に迎えに行ったら、荷物がそのまままで紅莉栖がどこにもいなかったの。」

「日本を出たのは間違いないかしら?」

「はい…。」岡部の返事にも力が無い。

「そう…。私も心配でしょうがないの。何か分かったら連絡してください。私も連絡します。」

「分かりました…。」



「ふう…」電話口からため息が聞こえる

「ちょっと！岡部倫太郎君！しっかりしなさい！」

「は、はい！？」岡部は電話の紅莉栖の母親から大声で叱咤される。  
岡部は驚いて体を直立させた。

「貴方の事を、私の娘が大切な人と言ったのよ！私と紅莉栖を失望させないの！」

「す、すみません！！！」

「いい？紅莉栖は、ちょっとやさっとじゃへこたれない強い子よ！絶対に無事よ！」

「は、はい！」

「貴方にとっても、紅莉栖は大切なんでしょ！？」

「はい！」

「よし！じゃ連絡待ってるわ！よろしくね！」

「了解しました！」

岡部は電話を持ったままおじぎをしていた。

「ふう…これは確かに紅莉栖のお母さんだ…」

「どうだった？岡部。」

「ミスターブラウン…僕の知り合いの母親でした。」

「ほう。で何だった？」

「いやちょっとそれは…」

「水くせえな…話せよ。何か力になれるかもしれねえ。」

「…、娘さんが行方不明なんです。」

「行方不明…か…」

「ふー。」ミスターブラウンは、ため息をつく。

「萌郁、絢と表に出てくれ。」

「…はい。」

「どっしたんです？」

「岡部…。俺はお前に賭けてみようと思う。」

「賭ける…とは？」

「俺と協力して欲しい。もちろんお前の望む事にも協力する。」

「一体何の事…」

「まずお前に謝らないといけねえ事がある。」

「なんです?」

「上には盗聴器が仕掛けてある。」

「な、なに!?!」

「ここ最近の会話はだいたい俺の耳に入っていると思ってくれ。」

岡部の目に殺気がこもる。

「その目…俺がどういふ人間かやはり知ってるみてえだな。」

ガタツ!

岡部はその場から逃げようとする。

「待て! 岡部!」

「何を待てと言っただ! 俺は、貴方の素性を不確定だが知っていた。」

「今、それが確定した以上俺に取れる行動は逃げる事だけだ!」

「分かっている! 頼む! お前に賭けたいんだ。」

「…」岡部は戻る。

「一体、何をしたいんだ…FB。」

「…その名を捨てたいんだ。」

「まさか、ラウンダーを抜けるとでも!?!」

「そうだ。」

「そんな事が可能なのか!?!」

「前に何回が試したが、無駄だった…」

「じゃ何故今!?!」

「岡部、お前だ。お前には何か不思議な力があるらしいな。」

「しかも、この通り普通なら知るはずのない俺のコードネームまで知っている。」

「…」

「だからこそお前に賭けたいと思ったんだ。」

「それに…あいつらのためにもだ。」

「ブラウンは、外にいる二人に目を配る。」

「萌郁もラウンダーの縛りから抜けさせよう?」

「…何を言ってる。萌郁がラウンダーだと？」

「何！？知らないのか！」

「おい岡部…冗談だろ…」ブラウンの顔が衝撃で歪む。

「メールを送ってみれば分かるはずだ…おそらく」

ブラウンは携帯を手にする。そして、宛先はM4に。

今は何をしているの？とメールを送信した。

外の萌郁が携帯を手取る。そして、すぐにブラウンの携帯に返信が入る。

今、バイト先の店長の娘さんと遊んでいます。とても可愛いですよ  
(、、)

携帯の返信を見たブラウンは、外の萌郁達を見て微動だにしない。

「なんてこった…俺は…あんな子までラウンダーにしていたのか…」  
ブラウンは顔を落としてうなだれる。

「今までメールはしなかったのか？」

「ああここで萌郁がバイトを初めてから、最近はまったくだった…」

「…そうか…だからお前は萌郁のIBM5100の探索をやめたん

「だな…」

「ああ。見つけなければ、かりそめでも平穏な生活はずだ。」

「その通りだ…俺も見つからない事を期待していた。」

「ふう…」ブラウンはまたため息をつく。

しばらく静寂が流れる。

「岡部、今はもうラウンダーの事はいい。」

「いいのか？」

「ああ、お前も具体的にどうすればいいか分からんだろう。」

「…」

「ふっ正直な奴だ。」

「そっぴやあの紅莉栖って子はお前の大切な女なのか？」

「ああ、そつだ。」

「きっぱり言いやがったな…この野郎…」

「お前のその大切な女はsernにいるぜ。」

「えっ…今なんて言った!!」

岡部は立ち上がり、ブラウンに掴みかかる。

「それは本当か!？」

「ああ。俺の所にじゃないがな。拉致する命令が出たようだ。」

「理由は!？」

「それはお前が良く知ってるんじゃないか？」

「…研究だ…そうか…sernか…もしかしたらと思っていたが…」  
(前の世界線では、紅莉栖は拉致されてタイムマシン研究をしたはずだ…そうかその意思の流れはここでも…)

岡部は紅莉栖の消息が分かった事の喜びが一瞬顔に出た。

しかし

「…まだ学生だろ…なんて顔しやがる…」  
ブラウンは顔をしかませる。

まゆりを助けるため、幾重にも重ねられた悲しみが岡部の心には依然としてあった。

そして今でもラウンダーに襲われた記憶、被験者の記憶がまゆりを苦しめる。

この世界では、sernによって紅莉栖が拐われた。

今、岡部は憤怒の形相になっていた。

「sernを潰す…」岡部がつぶやく。

「正気か岡部！？お前も無事じゃすまんぞ！」

「構わない！紅莉栖を助けsernを潰す！」

「ふー…岡部。忠告しておく。sernはお前もマークしているぜ。」

「何！？」岡部は驚く。

「正確に言えば、牧瀬紅莉栖に関わった者全員だ。」

「なんだと…。」

「俺の所に、行動を監視する命令が来た。」

「何のために…」

「おそらくは、牧瀬紅莉栖を探し出す時に、sernまで行き着くかどうか監視するためだと思うが  
それだけじゃないだろう。」

「…そうか」



「分かるか岡部。」

「俺達は、紅莉栖が研究に集中させるための人質…か。」

「だろうな」

「あと一つある。」

「何？まだあるのか！」

「あの、まゆりって言ったか？」

「まゆりがどうした！？」「ブラウンに食い入るように詰め寄る。」

「落ち着け岡部…」

「場合によっては拉致の命令がきていたぞ。」

「重要性で言えば、お前とあの子が紅莉栖の次になっていた。」

「なんだと…！」

「あの子が何をしたのかわからないが…お前はまだしもな…。」

「そんな…。」岡部は愕然とする。

（まさか、まゆりを被験者にした記憶を持っている人間がいるとでも言うのか…そうとしか…）

「もちろん、俺は拉致する気は無い。上からの命令ものらりくらりとやるつもりだ。」

ブラウンは口元を緩ませる。

「だが…牧瀬紅莉栖の行動を報告してしまったのは間違いなく俺だ。」

「

岡部、すまん。」ブラウンは岡部の目の前で頭を下げる。

「今はもうそれどころじゃない…新しい命令はきているのか？」

「いやまだだ。しかし、あまり時間は無さそうだ。」ブラウンは岡部に厳しい視線を向ける。

「ふー」岡部から深いため息が漏れる。

「…盗聴器はどこにあるんだ？」

「あのテレビだ。もう盗聴する気はねえが、コンセントを引き抜けばいい。信じてくれ。」

「…どうしてここまで、話す気になった？ 言うておくが、今の俺には、お前たちをを一般人にするような力はないぞ…」

「さあな…なんていうか、ちょっと真人間になってみたかったのかもな…」ブラウンは外の二人を見つめる。

「今は…ひとまず失礼する。」

「岡部：、行動に出るなら早いほうがいい。もうserverは動いているはずだ」

「あんたが言うな：！！！！だが、嫌でも協力はしてもらおう」岡部は声を殺し、言い放つ。

「ああ、そのつもりだ」

岡部は店を出た。

「岡部：君？」岡部のただならぬ雰囲気、萌郁が困惑している。

岡部はラボに戻る階段を踏みしめ上がっていく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9086w/>

---

Steins;Gate「after」

2011年10月22日03時36分発行